南国市埋蔵文化財調査報告書　第19集

岩村遺跡群Ⅳ

－岩村地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書－

1999. 3

高知県南国市教育委員会

壺棺１（286）

壺棺２（287）

序

南国市は、高知県の中央部に位置し、四国山地に連なる山間部と、物部川と国分川により育まれた肥沃な香長平野により形成されています。平野部の南端は太平洋に面し、黒潮の恩恵による温暖な気候のもと、早場米の産地として知られ、稲穂のたゆたう田園風景の広がりは、豊かな実りをもたらしています。

この恵まれた自然環境は、太古より人々の繁栄を生み、土佐の政治・文化の中心地として長い歴史を積み重ねてまいりました。その一部は遺跡として残り、我々に祖先の暮らしぶりを今に伝えてくれます。南国市は県内で最も遺跡の集中する地域であり、急速に進展する開発事業と埋蔵文化財保護との調整が重要な課題となっています。

岩村地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う岩村遺跡群発掘調査は平成７年度から始まり、今年でいよいよ最後の年を迎えました。これまでの調査では、弥生時代・中世・近世の３時期を中心とした遺構が検出されました。特に岩村土居城跡の堀の様相が明らかになったことは、大きな成果となりました。

本書は、報告が残っていたⅥ区を中心にまとめたもので、岩村遺跡群の一連の調査の最終報告となるものです。今後広く利用され、文化財保護および学術研究の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたりご指導を賜りました高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第３班長出原恵三氏、高知県教育委員会、高知県文化財団埋蔵文化財センター、また文化財への深いご理解とご協力をいただいた高知県中央東耕地事務所、物部川右岸土地改良区、地権者、地元市民の方々、そして発掘・整理作業にご尽力いただいた作業員の皆様に心より厚くお礼を申し上げます。

平成11年３月

南国市教育委員会

教育長　　西森善郎

例　言

1．本書は、南国市教育委員会が高知県の委託を受け、平成７～10年度に実施した岩村地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う岩村遺跡群の緊急発掘調査報告書第Ⅳ集である。

2．岩村遺跡群は、高知県南国市福船に所在する。

3．平成10年度の調査は、平成10年10月９日～平成10年12月25日まで行った。

4．各年度ごとの調査は以下とおりである。

平成７年度‥‥Ⅰ区（1,561㎡）、Ⅱ区（784㎡）、計2,345㎡

平成８年度‥‥Ⅲ区（390㎡）、Ⅳ区（650㎡）、Ⅴ区(500㎡)、Ⅵ区（200㎡）、Ⅶ区（1,490㎡）、Ⅷ区（270㎡）、Ⅸ区（410㎡）、計3,910㎡

平成９年度‥‥Ⅵ区（307㎡）、Ⅶ区（418㎡）、Ⅷ区（230㎡）、Ⅹ区（2,320㎡）、Ⅺ区（1,124㎡）、計4,399㎡

平成10年度‥‥Ⅵ区（846㎡）

Ⅰ区については『岩村地区県営圃場に伴う岩村遺跡群発掘調査概要』で、Ⅱ～Ⅳ区については『岩村遺跡群Ⅱ』で、Ⅴ・Ⅶ・Ⅸ区については『岩村遺跡群Ⅲ』で既に報告書を刊行している。本書は、Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ・Ⅺ区の報告書である。

5．発掘調査は、高知県教育委員会、高知県文化財団埋蔵文化財センターのご協力を得て、南国市教育委員会が主体となって実施した。平成10年度の調査体制は以下のとおりである。

調　査　員　　三谷民雄（南国市教育委員会　社会教育課　主事）
調査補助員　　北村邦博（　〃　　〃　　臨時職員）
〃　　水田宜秀（　〃　　〃　　〃　）
〃　　小川容弘（　〃　　〃　　〃　）
総務担当　　橋田和典（　〃　　〃　　主幹）

6．本書の執筆・編集は、出原恵三氏（高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第３班長）のご指導のもとに三谷が行った。

7．現場作業においては、出原氏のご指導・ご教示を得た。整理作業においては、高知県文化財団埋蔵文化財センター整理作業員の山中美代子氏、矢野雅氏などのご協力を得た。記して深く謝意を表したい。

8．発掘調査にあたっては、物部川右岸土地改良区の皆様をはじめ、地元住民の方々のご理解・ご協力を得た。また現場作業員、整理作業員の皆様のご協力を得た。記して深く謝意を表したい。

9．当遺跡出土遺物は南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は96－ＮＩ、97－ＮＩ、98－ＮＩである。

本文目次

第Ⅰ章　これまでの経過と調査の方法
1　これまでの経過 …… 1
2　調査の方法 …… 2

第Ⅱ章　周辺の地理的、歴史的環境
1　地理的環境 …… 4
2　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　調査の成果
1　Ⅵ区の調査
（1）Ⅵ区の概要と基本層序 …… 7
（2）弥生時代・古墳時代の遺構と遺物 …… 12
（3）古代～近世の遺構と遺物 …… 36
2　Ⅷ区の調査
（1）Ⅷ区の概要 …… 42
（2）検出遺構と遺物 …… 42
3　Ⅹ区の調査
（1）Ⅹ区の概要 …… 46
（2）検出遺構と遺物 …… 46
4　Ⅺ区の調査
（1）Ⅺ区の概要 …… 49
（2）検出遺構と遺物 …… 49

第Ⅳ章　考　察 …… 53

挿図目次

Fig.1　南国市位置図 …… 2
Fig.2　岩村遺跡群調査区位置図 …… 3
Fig.3　岩村遺跡群の位置と周辺の遺跡 …… 6
Fig.4　Ⅵ区調査区位置図および基本層序 …… 8
Fig.5　Ⅵ－1区検出遺構全体図 …… 9
Fig.6　Ⅵ－2区検出遺構全体図 …… 10

Fig.7　Ⅵ－3区検出遺構全体図 …… 11
Fig.8　ST1平面・エレベーション・出土遺物実測図 …… 13
Fig.9　ST2平面・エレベーション・出土遺物実測図 …… 14
Fig.10　ST3・4・6平面・セクション図 …… 16
Fig.11　ST3出土遺物実測図 …… 17
Fig.12　ST4出土遺物実測図 …… 18
Fig.13　ST5平面・セクション・出土遺物実測図 …… 19
Fig.14　ST5出土遺物実測図 …… 20
Fig.15　ST5出土遺物実測図 …… 21
Fig.16　ST6出土遺物実測図 …… 22
Fig.17　ST7平面・セクション・出土遺物実測図 …… 24
Fig.18　ST7出土遺物実測図 …… 25
Fig.19　ST8～10平面・セクション・エレベーション図 …… 26
Fig.20　ST8出土遺物実測図 …… 27
Fig.21　ST9出土遺物実測図 …… 28
Fig.22　ST10出土遺物実測図 …… 29
Fig.23　SK5・6・11・12平面・セクション・エレベーション・出土遺物実測図 …… 31
Fig.24　SK13平面・エレベーション・出土遺物実測図 …… 32
Fig.25　壺棺1出土状況・平面・エレベーション・実測図 …… 33
Fig.26　壺棺2実測図 …… 34
Fig.27　SD3・6・7・12～14・16エレベーション・出土遺物実測図 …… 35
Fig.28　SK1～4・7～10平面・セクション・エレベーション図 …… 37
Fig.29　SD1・2・4・5・8～11・15・17セクション・エレベーション・出土遺物実測図　41
Fig.30　Ⅷ区検出遺構全体図 …… 43
Fig.31　SK2・SD1～6平面・エレベーション・SD1出土遺物実測図 …… 45
Fig.32　Ⅹ区検出遺構全体図 …… 47
Fig.33　Ⅺ区検出遺構全体図 …… 51

写真図版目次

PL.1　Ⅵ－1区中層完掘状況（東より）、Ⅵ－1区下層完掘状況（東より）
PL.2　Ⅵ－2区上層検出状況（東より）、Ⅵ－2区上層完掘状況（東より）
PL.3　Ⅵ－2区下層完掘状況（東より）、Ⅵ－3区検出状況（東より）
PL.4　Ⅵ－3区検出状況（西より）、Ⅵ－3区完掘状況（東より）
PL.5　Ⅵ－3区完掘状況（西より）、ST1完掘状況

PL. 6　ST 2 完掘状況、ST 2 遺物出土状況（14・15）
PL. 7　ST 2 遺物出土状況（16）、ST 3 完掘状況
PL. 8　ST 3 遺物出土状況（24）、ST 3 遺物出土状況（28）
PL. 9　ST 3 遺物出土状況（44）、ST 4 完掘状況
PL.10　ST 5 完掘状況、ST 5 遺物出土状況（67）
PL.11　ST 5 遺物出土状況（69）、ST 5 遺物出土状況（112）
PL.12　ST 6 遺物出土状況（124）、ST 6 遺物出土状況（125）
PL.13　ST 7 完掘状況、ST 7 遺物出土状況(164)
PL.14　ST 8 ～10完掘状況、ST10完掘状況
PL.15　ST10中央ピット完掘状況、ST10遺物出土状況（250）
PL.16　SK 6 完掘状況、SK 6 遺物出土状況（265）
PL.17　SK 6 遺物出土状況（266）、壺棺 1 出土状況（286）
PL.18　SK 1 完掘状況、SK 3 完掘状況
PL.19　SK 9 半截状況、SK 9 完掘状況
PL.20　Ⅷ－ 2 区完掘状況（東より）、Ⅹ－ 1 区完掘状況（南より）
PL.21　Ⅹ－ 2 区完掘状況（南より）、Ⅹ－ 3 区完掘状況（北より）
PL.22　Ⅹ－ 4 ・ 5 区完掘状況（南より）、Ⅺ－ 1 区完掘状況（南より）
PL.23　ST 2 （15）・ST 3 （23・25～28・31）出土遺物
PL.24　ST 3 （44・45）・ST 4 （50～52）・ST 5 （67）出土遺物
PL.25　ST 5 （69・89・91・96・97）・ST 6 （121）出土遺物
PL.26　ST 6 （122～125）・ST 7 （164・175）出土遺物
PL.27　ST 7 （189・190）・ST 8 （197・202・204）出土遺物
PL.28　ST 8 （206・226）・ST 9 （227・242・243）・ST10（247）出土遺物
PL.29　ST10(248・250）・SK 6 （265・266）・SK13（278・280）出土遺物
PL.30　壺棺 1 （286）・壺棺 2 （287）
PL.31　ST 1 （ 2 ・ 4 ）・ST 3 （22・39～41）・ST 4 （59）・ST 5 （112～114）出土遺物
PL.32　ST 5 （115）・ST 6 （130）・ST 7 （177・178・180・183・184）・ST 8 （208・216・219）
出土遺物
PL.33　ST 8 (220・221・224）・ST 9 (232・236・238・239・241）・SD 4 (307）・Ⅷ区SD 1 (331)
出土遺物
PL.34　ST 1 (5 ・ 6 ）・ST 2 (19・20）・ST 4 (63）・ST 5 (118）・ST10(261・262）・SD13 (296)
SD 1 （297）出土遺物

第Ⅰ章　これまでの経過と調査の方法

1．これまでの経過

（1）調査に至る経過

南国市岩村地区において、平成6年度より高知県三大河川の一つである物部川の右岸の農地50.6haを対象とした岩村地区県営担い手育成基盤整備事業が開始され、狭隘で不整備な農地の区画整理や統合、農道・用排水路等の系統的な整備を進め、近代的な農地への転換を図っている。

この事業対象地域内には岩村土居城跡が存在することから、南国市教育委員会は、平成6年度に城跡周辺の遺跡の範囲確認のための試掘調査（面積205㎡）を実施した。その結果、弥生時代後期の竪穴住居址・溝跡・柱穴、奈良～平安時代の溝跡・柱穴、室町～戦国時代の井戸跡・柱穴・土坑等、近世の溝跡等が検出された。このことから、この地に弥生時代～近世にかけての複合遺跡が確認され、岩村土居城跡と合わせて岩村遺跡群と名付けられた。

南国市教育委員会は、遺跡の持つ重要性に照らし、開発部局に対してその保護と調和のとれた開発行為の実施について数次にわたる協議を重ね、特に遺跡部分の削平面積については極力少なくするよう工法などの検討を求めてきた。そして、道路・水路建設予定地、および農地削平地等の止むを得ず遺跡が破壊されるおそれのある区域については記録保存のための本調査を行うこととなった。調査は、南国市が高知県（南国耕地事務所）の委託を受け、南国市教育委員会が調査主体となり、高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと、平成7年度より4ヶ年計画で行うことになった。

（2）平成7年度の調査（Fig.2）

平成7年度の調査は、平成7年9月29日から平成8年2月7日まで実施した。調査区については便宜上、現在の水田や畑の畦畔をそのまま利用して任意にⅠ区（1,561㎡）、Ⅱ区（784㎡）を設定した。

Ⅰ区からは、調査区西方隅で、南北に伸びる2条の重複している堀が検出された。この堀は、15世紀代、18～19世紀代という2時期に機能していた遺構であることが出土遺物から判明し、中世末、近世における屋敷地を囲む堀としての性格を与えることができた。

Ⅱ区では弥生時代後期の竪穴住居址2棟、古墳時代初頭の竪穴住居址1棟が検出され、古墳時代の住居址より鉢としては県下初の出土例となる吉備搬入土器が出土した。

平成7年度は、Ⅰ区についての報告書を刊行した。（南国市教育委員会『岩村地区県営圃場に伴う岩村遺跡群発掘調査概要』1996.3）

（3）　平成8年度の調査（Fig.2）

平成8年度の調査は、平成8年9月11日から平成9年2月10日まで実施した。調査区は新たにⅢ区（390㎡）、Ⅳ区（650㎡）、Ⅴ区（500㎡）、Ⅵ区の一部（200㎡）、Ⅶ区の一部（1,490㎡）、Ⅷ区の一部（270㎡）、Ⅸ区（410㎡）を設定した。

Ⅲ区からは、15世紀代の溝1条が検出された。Ⅳ区からは、遺構は検出されなかった。Ⅴ区からは、弥生時代後期の竪穴状遺構1基が検出された。Ⅵ区からは弥生時代前期の土坑2基、後期の竪

穴住居址２棟等が検出された。Ⅷ区は岩村土居城跡の堀排定地の調査であり、内堀、外堀の２重の堀が巡っていることが確認された。Ⅷ区からは弥生時代後期の溝４条、Ⅸ区からは岩村土居城跡の西側の堀と思われる溝が検出された。

平成８年度は、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の報告書を刊行した。（南国市教育委員会『岩村遺跡群Ⅱ－岩村地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書－』1997.3）

（３）　**平成９年度の調査（Fig.2）**

平成９年度の調査は、平成９年５月26日から平成10年２月２日まで実施した。調査区は新たにⅥ区の一部（307㎡）、Ⅶ区の一部（230㎡）、Ⅷ区の一部（230㎡）、Ⅹ区（2,320㎡）、Ⅺ区（1,124㎡）を設定した。

Ⅵ区からは弥生時代後期の竪穴住居址が６棟、壺棺２基等が検出された。Ⅶ区では、岩村土居城跡の外堀の北域が確認された。Ⅷ・Ⅹ・Ⅺ区では主に近世の遺構が確認された。

平成９年度は、Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ区の報告書を刊行した。（南国市教育委員会『岩村遺跡群Ⅲ－岩村地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書－』1998.3）

２．調査の方法

各調査区ともに遺構検出面は浅く、耕作土直下である。調査の手順としては、重機を用いて耕作土を除去した後、手作業で遺構の検出、完掘作業を行った。包含層遺物の取上げ、遺構の実測については、公共座標に基づいて調査区全体に４ｍ方眼をかけ、東西方向に１，２，３，・・・、南北方向にA，B，C，・・・、のNoを付して、地点の記録および実測を行った。平面測量および地層断面図については、20分の１を基本に適宜任意の縮尺を用いた。図中の方位は全て真北を用いた。遺構のナンバーリングについては、便宜上各調査区ごとに付した。

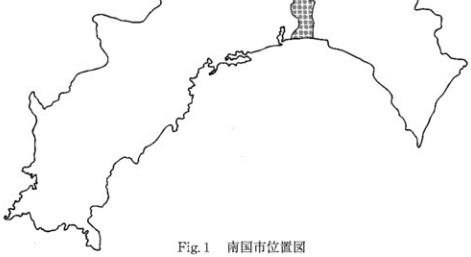


Fig.１　南国市位置図

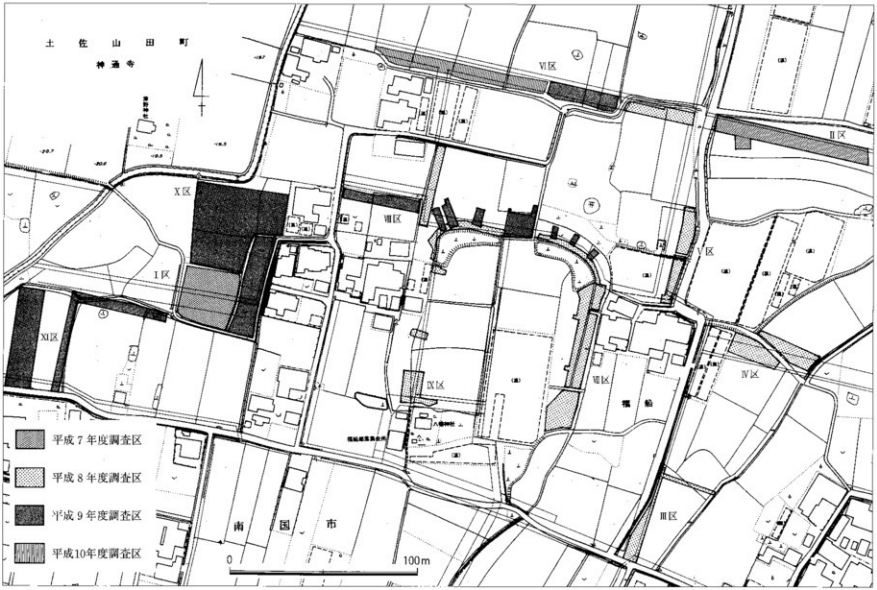


Fig. 2　岩村遺跡群調査区位置図

第Ⅱ章　周辺の地理的、歴史的環境

1．地理的環境

岩村遺跡群は、南国市の東端、県下三大河川の一つであり、剣山系の白髪山に源を発し、流路延長70.5kmの物部川河口から約３km程上流にのぼった西岸に位置し、現地表は、海抜19.8m前後を測る。岩村遺跡群の所在する南国市は、東西に弧状の長い海岸線を有する高知県のほぼ中央部にあり、県下最大の平野である高地平野の東部に位置する。高知平野の中でも、南国市、土佐山田町、野市町及びその周辺の平野部は、香美郡と長岡郡に属していたことから、香長平野とも呼ばれており、本県最大の穀倉地帯をほこっている。南国市の地形は北方山地と丘陵群、それに香長平野を含めた平野部に区分される。

香長平野はところによって微高地と低地がかなり複雑に交錯するため、平野の等高線は部分的に乱れているが、土佐山田町神母木を中心にほぼ同心円状に配列する扇状地を形成している。香長平野は隆起と沈降を繰り返しつつ、坂折山、介良山、船岡山、吾岡山等の丘陵間の低地もしくは多島式内湾が、物部川、国分川等による扇状地や三角州によって埋められたものであり、この堆積作用は現在もなお続いている。物部川による扇状地の傾斜は相対的に緩く、面積もさほど大きくないが、本県では最大の扇状地である。

2．歴史的環境

南国市は、高知平野東部の大半を占め、遺跡の密度は県下で最も高く、各時代の遺跡の所在が知られており、近世以前は土佐の中心地として栄えた地域であった。

旧石器時代の遺跡は、奥谷南遺跡が存在する。ここは全国でも例の少ない旧石器時代の岩陰遺跡であり、ナイフ形石器・スクレイパー・細石器・尖頭器など多量の石器が出土した。

縄文時代の遺跡は県西部の四万十川流域に比べ少なく、数ヶ所確認されているにすぎない。時期的には後期が中心である。奥谷南遺跡では、草創期の隆起線文土器・隆帯文土器が出土し、中期末から後期初頭にかけてのドングリの貯蔵穴が確認されている。栄エ田遺跡からは、後期から晩期に至る土器が多量の磨製石斧と共に出土した。これらの遺跡は、丘陵部が平野部に接する地に立地しており、狩猟・採集に適した地域であった。南の平野部では田村遺跡群のLoc.47などが所在する。田村遺跡群では、後期後半の磨消縄文を中心とする土器群と共に多量の打製石斧が出土しており、低地における縄文遺跡の立地を考える上で注目される。

弥生時代になると遺跡数とその規模は、急激に発展する。稲作に適した広大な沖積平野を有することから、市域のほぼ全域に遺跡が展開している。なかでも田村遺跡群は、その規模において群を抜いており、弥生時代を通して高知平野における拠点的母村集落と考えられる。前期においては竪穴住居群と掘立柱建物群の存在や、水田跡などが確認されている。中期～後期にかけては集落の西方への移動がうかがわれ、土器以外にも後漢の方格規矩四神鏡片や勾玉・管玉・ガラス小玉などが出土しており、引き続き高知平野における拠点的集落であったと考えられる。その一方、前期後半以後になると集落が拡散し、平野部ばかりではなく山間部にも遺跡の立地をみるようになる。弥生

時代後期になると、遺跡の立地は北部の長岡台地上に移る。竪穴住居址が発見された三畠遺跡や、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居址が多数検出された東崎遺跡、小籠遺跡、土佐山田町のひびのき遺跡のような大規模な集落が出現してくる。

古墳時代においても高知平野が遺跡分布の中心的位置を占め、土佐山田町、南国市北部の山麓部及び独立丘陵上に、6～7世紀の横穴式石室をもつ古墳が多数存在している。なかでも小蓮古墳は大型の横穴式石室をもつ円墳であり、香長平野北部を中心とする有力者の墳墓と考えられ、22基の古墳からなる県下最大の群集墳である舟岩古墳群もこの地域に造築されている。また、国分川右岸にある新改古墳は、この地域では大型に属する6世紀代の古墳であり、幅2m、長さ5m、高さ2mを測る横穴式石室からは、金環や各種馬具、直刀などが出土している。これらの山麓には、6世紀後半から7世紀以降数多くの須恵器窯が出現する。土佐国衙跡の発掘調査では6～7世紀の竪穴住居址が30棟前後検出されており、今後も調査が進むにつれ、新たに発見されるものと考えられる。

古代には、律令制度のもとでの土佐国を伝える遺跡として、比江廃寺跡や土佐国衙跡、土佐国分寺跡が所在しており、古代土佐国の政治・文化の中心地であったことを示している。比江廃寺跡は白鳳時代の寺院跡であり、塔心礎は原位置を保っていることが発掘調査により確認された。土佐国衙跡では、昭和54年度より11次にわたる確認調査が行われ、官衙を構成すると考えられる掘立柱建物群などが検出されているが、政庁など国衙の中心遺構は確認できていない。土佐国分寺跡では東側に寺域を示すとみられる土塁が残されており、現状変更に伴う調査及び伽藍配置確認のための調査がな行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡等が検出されている。その他、南国市域の古代の遺跡としては、田村遺跡群において平安時代前半の掘立柱建物群が検出されており、「田村庄」関係の遺構ではないかと考えられている。

中世になると遺跡数も増加し、分布も平野部の城館跡や周辺山麓部の山城跡等に代表されるようにほぼ全域に渡る。これらに伴い生活域も拡散し、ほぼ現在我々が目にするような景観の基礎が形成された。田村遺跡群では、溝に囲まれた屋敷跡が31ヶ所検出されており、南北朝期に機能したもの、守護代細川氏入城後に機能したもの、長宗我部氏台頭に伴って機能していたものと3時期に区分することができる。溝は1辺30～50mの規模をもち、約半数では石組み等の井戸や屋敷墓を検出した。掘立柱建物跡は主屋とみられる大型のものが、数回にわたり建替えられ、周辺には小規模な掘立柱建物跡が付属していた。田村城館跡は14世紀～15世紀においての細川氏の居館であり、城郭は3重の濠で囲まれた複合城郭である。郭内には区画溝や掘立柱建物跡が存在しており、外濠の幅は4m～5m、深さ3.5mを測り、この中からは土師質土器や護符が出土している。西部に位置する岡豊城跡は長宗我部氏の居城であり、礎石建物跡、石敷遺構、土坑、溝、土塁石垣、階段状遺構を検出している。出土遺物からこの城の機能した時期を15世紀後半からおよそ100年間としている。その他の中世城跡では、久礼田城跡、植田城跡、細川土居城跡、岩村遺跡群の周辺では包地土居城跡(5)、徳弘土居城跡(21)、立田土居城跡(23)などが所在している。

番号	名　称	時　代	番号	名　称	時　代	番号	名　称	時　代
1	岩村遺跡群	弥生～中世	11	古流曽遺跡	古墳～平安	21	徳弘土居城跡	中　世
2	岩村土居城跡	中　世	12	横落遺跡	弥生～平安	22	北角田遺跡	弥生～平安
3	若宮遺跡	弥生～平安	13	絵物ヶ内遺跡	古墳～平安	23	立田土居遺跡	中　世
4	垣添遺跡	古墳～中世	14	カントヲリ遺跡	縄文・古墳～平安	24	修理田遺跡	弥生～平安
5	包地土居城跡	中　世	15	表中内遺跡	弥生～平安	25	田村遺跡群	縄文～近世
6	芝田遺跡	古墳～中世	16	上横田遺跡	古墳～平安	26	田村城跡	中　世
7	ムロカ内遺跡	弥生～中世	17	大北遺跡	古墳～中世	27	千原城跡	中　世
8	屋根添遺跡	古　墳	18	平杭遺跡	弥生～古墳	28	季重遺跡	古墳～近世
9	芝ノ端遺跡	古　墳	19	高添遺跡	弥生～平安	29	公家ノ前遺跡	古墳～近世
10	石神遺跡	弥生～平安	20	寺ノ前遺跡	弥生～中世	30	司例田遺跡	古墳～近世

Fig. 3　岩村遺跡群の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査の成果

1．Ⅵ区の調査

（1）Ⅵ区の概要と基本層序

① 概　要（Fig.4）

東西174m、南北6m、面積1,357㎡の調査区である。東側より順にⅥ－1区（200㎡）、Ⅵ－2区（307㎡）、Ⅵ－3区（846㎡）と区分する。Ⅵ－1区は平成8年度に、Ⅵ－2区は平成9年度に、Ⅵ－3区は平成10年度に調査を実施した。弥生時代後期終末～古墳時代初頭の竪穴住居10棟、弥生時代前期の土坑2基、後期の土坑3基、壺棺2基、溝7条、古代の溝10条、近世の土坑8基などを検出した。

② 基本層序（Fig.4）

Ⅵ－1区東部南壁（A～B）とⅥ－3区中央部サブトレンチ西壁（C～D）で観察した。両地点とも耕作土下に粘質土層、次いで砂質土層が堆積しており、旧物部川による沖積作用が認められる。（A～B）はやや複雑な堆積状況を示すが、（C～D）では極めて安定した様相を呈している。

Ⅵ－1区東部南壁（A～B）

Ⅰ層：灰黄褐色粘質土。安定した堆積を示していて、層厚10cm前後を測る。

Ⅱ層：灰黄色粘質土。部分的な堆積であり、層厚10cm前後を測る。

Ⅲ層：茶灰色粘質土。部分的な堆積であり、層厚10cm前後を測る。

Ⅳ層：灰褐色シルト層。部分的な堆積であり、層厚10cm前後を測る。

Ⅴ層：黄茶色シルト層。安定した堆積であり、層厚30cm前後を測る。弥生時代以降の堆積により形成された土層である。

Ⅵ層：灰茶色砂層。部分的な堆積であり、層厚15cm前後を測る。

Ⅶ層：灰茶色シルト層。部分的な堆積であり、層厚10～30cmを測る。

Ⅷ層：茶色粘質土。部分的な堆積であり、層厚15cm前後を測る。弥生土器を多く包含する。旧物部川により形成された自然堤防の斜面にあたると思われる。

Ⅸ層：黄茶色砂層に茶色粘土のブロックを含む。部分的な堆積であり、層厚20cm前後を測る。

Ⅹ層：黄茶色砂層。部分的な堆積であり、層厚10cm前後を測る。

Ⅵ－3区中央部サブトレンチ西壁（C～D）

Ⅰ層：耕作土。層厚20cm前後を測る。

Ⅱ層：褐灰色粘質土（7.5YR6/1）。安定した堆積であり、層厚20cm前後を測る。弥生土器包含層。

Ⅲ層：灰褐色シルト層（7.5YR6/2）。安定した堆積であり、層厚20cm前後を測る。弥生土器、炭化物を包含する。

Ⅳ層：黄灰色砂層（2.5Y6/1）。安定した堆積であり、層厚30cm前後を測る。拳大の礫を含む。（A～B）のⅩ層に相当する。

Ⅴ層：灰色粘質土（7.5Y6/1）。現代溝跡である。

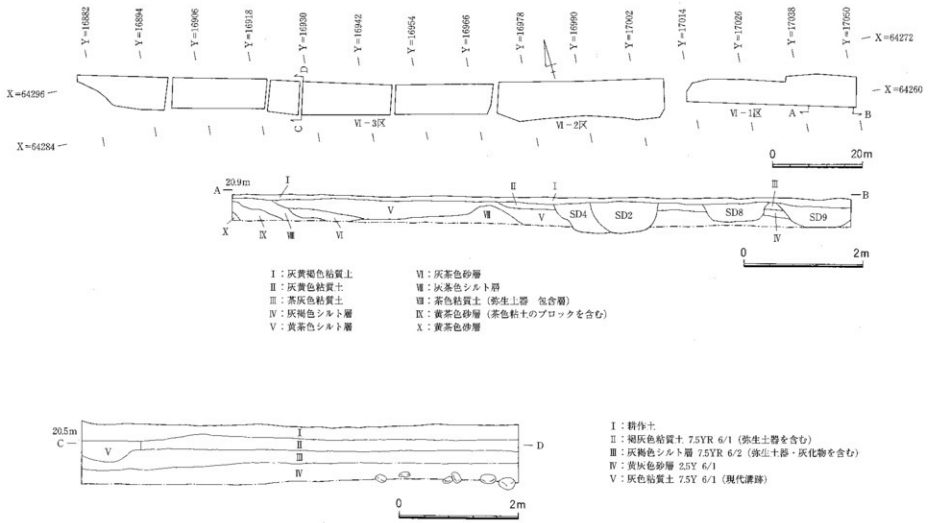


Fig. 4　Ⅵ区調査区位置図および基本層序

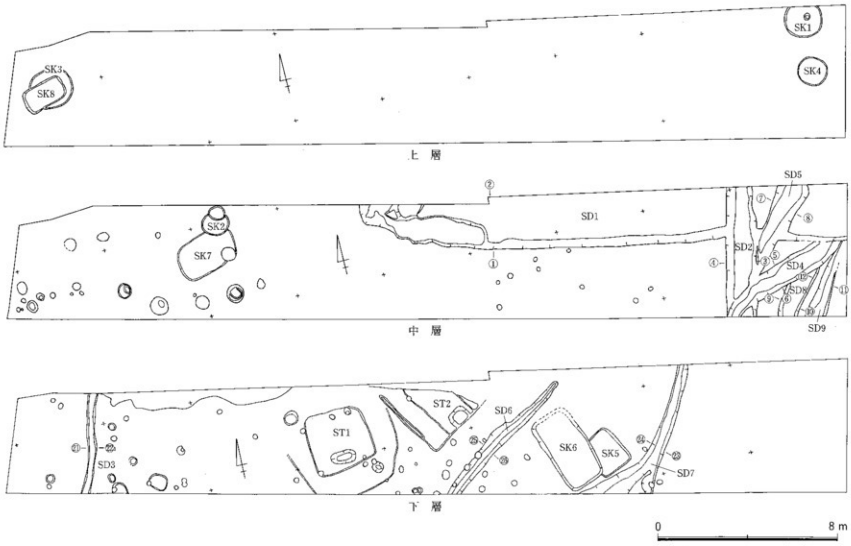


Fig. 5　Ⅵ－１区検出遺構全体図

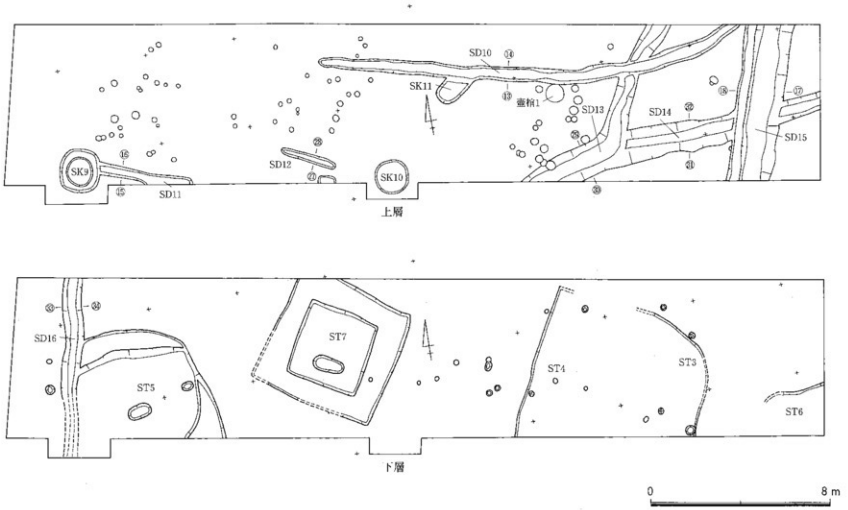


Fig. 6　Ⅵ－２区検出遺構全体図

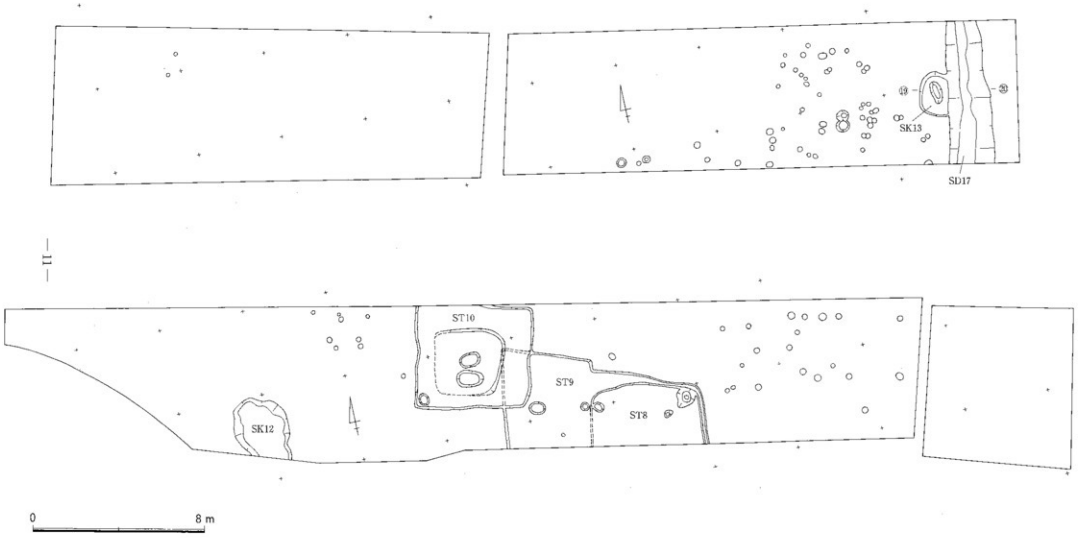


Fig. 7　Ⅵ－3区検出遺構全体図

（2）弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

① 竪穴住居

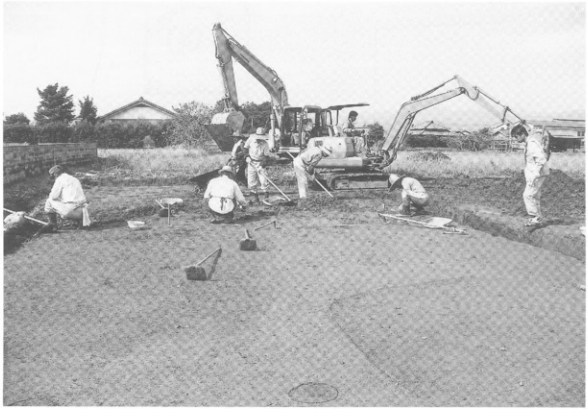
ST 1 (Fig.8)

Ⅵ－1区中央部の下層で検出された一辺が4.7m前後を測る隅丸方形の竪穴住居址である。北側のプランは精査したにもかかわらず、明らかにすることができなかった。検出面から床面までの深さは30cm前後を測る。床面は地山削り出しによるしっかりとしたベッド状遺構を有する。高床部の幅は1.1m前後、低床部からの高さは8cm前後である。中央ピットは中心部やや南側に位置し、東西に主軸を置く長楕円形を呈している。長軸は112cm、短軸は58cm、深さは16cmを測る。中央ピットの北側には東西約180cm、南北約110cmの不整形な範囲で炭化物が確認された。

出土遺物は細片が多く、図示できたのは（甕：1・2、鉢：3・4、叩石：5、打製石包丁：6）の6点である。ST 1は弥生時代後期終末に属する住居址である。

ST 2 (Fig.9)

Ⅵ－1区中央部の下層で検出され、ST 1と近接している。住居址の北半分は調査区外であり、明らかにすることができなかったが、一辺が4m前後の方形の竪穴住居と想定される。検出面から床面までの深さは23cm前後で、埋土は茶褐色粘質土の単純一層である。床面は、削り出しによるベッド状遺構を有し、住居西側に幅90cm、高さ6cm前後の高床部が認められる。東側でも高床部の一部が検出されたが、大部分が調査区外のため、その規模を明らかにすることはできなかった。また、住居西壁際には幅18cm、深さ4～5cmの壁溝が2.7mにわたって確認された。住居南壁際には長軸92cm、短軸70cm、深さ8.7cmを測る隅丸方形を呈する落ち込みが検出された。



調査風景

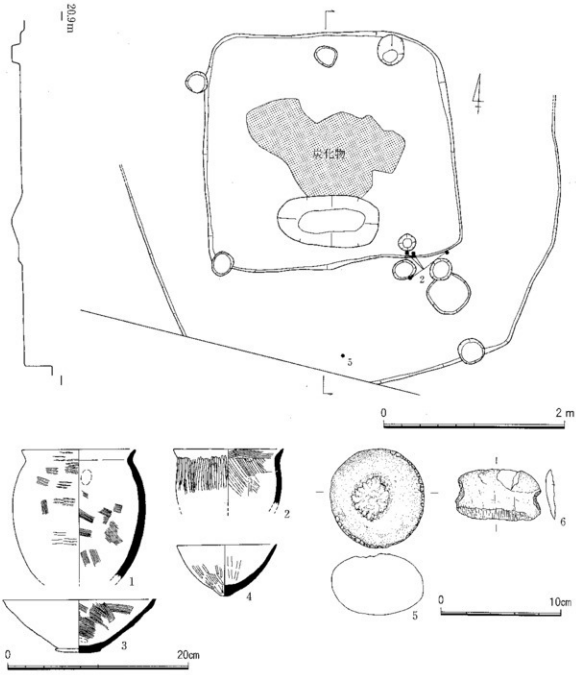


Fig. 8　ST 1 平面・エレベーション・出土遺物実測図

出土遺物は、図示した14点（壺：7・8、甕：9～15、手捏ね：16、鉢：17・18、砥石：19、磨製石斧：20）がST 2 に伴うものである。出土位置を図示した遺物のうち18は床上15cm程の埋土中より出土し、9・14・15・16・19・20は床面より出土した。ただし、磨製石斧（20）は弥生時代中期以前に遡り、混入品と思われる。これら床面よりの一括性の高い遺物により、ST 2 は弥生時代後期終末～古墳時代初頭に属すると考えられる。

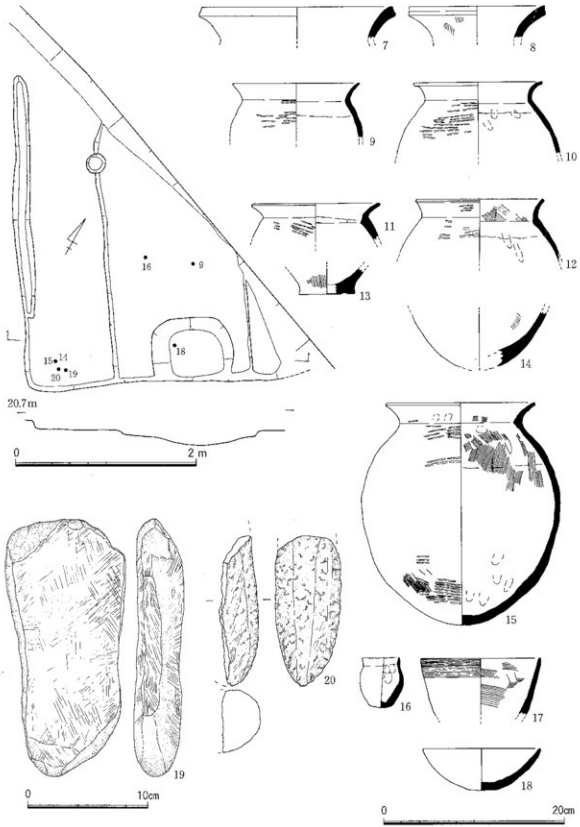


Fig.9　ST 2 平面・エレベーション・出土遺物実測図

ST３（Fig.10）

Ⅵ－２区東部下層で検出された竪穴住居址である。SD10、SD13、SD14によって切られており、特に西側では削平が激しく、精査したにもかかわらず、プランを明確にすることができなかった。現状での検出部分からみると、規模は判然としないが、隅丸方形を呈している。検出面から床面までの深さは13～20cmを測り、埋土は褐灰色粘質土（7.5YR4/1）の単純一層である。

出土遺物は、図示した25点（壺：21～25、甕：26～38、鉢：39～43、高坏：44・45）がST３に伴うものである。そのうち23～25・28・29・31・44・45は床面よりの出土である。これら床面よりの一括性の高い遺物により、ST３は弥生時代後期中葉に属すると考えられる。

ST４（Fig.10）

Ⅵ－２区東部下層で検出された竪穴住居址である。SD10、SD13などによって切られており、特に東側では削平が激しく、精査したにもかかわらず、プランを明確にすることができなかった。現状での検出部分からみると、一辺が6.6m前後の方形を呈する竪穴住居と思われる。検出面から床面までの深さは15cm前後を測り、埋土はⅠ層：黒褐色粘質土（7.5YR3/1）、Ⅱ層：褐灰色粘質土（7.5YR4/1）である。

出土遺物は、図示した18点（壺：46～49、甕：50～57、鉢：58～61、高坏：62、打製石包丁：63）がＳＴ４に伴うものである。そのうち51・53・54・57・61は床面よりの出土である。これらの出土遺物によりＳＴ４は弥生時代後期終末に属する。

ST５（Fig.13）

Ⅵ－２区西部下層で検出された竪穴住居址である。住居址の南側は調査区外であり、西側はSD16によって切られているが、一辺が5.6m前後の隅丸方形の平面形が復元される。検出面から床面までの深さは45cm前後であり、埋土はにぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）の単純一層である。北側にはベッド状遺構を有し、幅80cm前後、高さ15～20cmの高床部が認められる。東側の段部については、その性格は不明である。中央ピットは中心部やや南側に位置し、東西に主軸を置く長楕円形を呈している。長軸は112cm、短軸は56cm、深さは15cmを測る。

出土遺物は図示した57点（壺：64～80、甕：81～104、甕蓋：105、鉢：106～117、砥石：118、支脚119・120）がST５に伴うものである。そのうち67・69・83・88・89・91・96・97・102・108・110・112・113は床面よりの出土であり、111・114は中央ピットの埋土中よりの出土である。これら床面出土の一括性の高い遺物により、ST５は弥生時代後期終末に属する。

ST６（Fig.10）

Ⅵ－２区東部下層で検出された竪穴住居址である。住居址の西側はSD15に切られ、東側および南側は調査区外であるため、規模および平面形を明らかにすることはできなかった。削平が激しく、検出面から床面までの深さは10cm前後であり、埋土は褐灰色粘質土（7.5YR4/1）の単純一層である。

出土遺物は図示した12点（壺：121～123、甕：124～129、鉢：130、高坏：131・132）がST６に伴うものである。そのうち127・129・132が床面よりの出土であり、他は埋土中よりの出土である。ST６は弥生時代後期終末に属すると思われる。

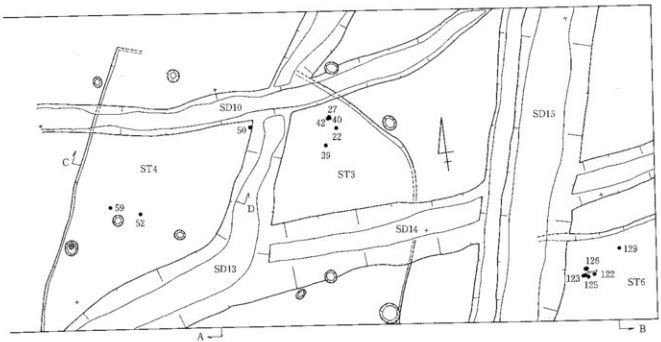


Fig.10　ST 3・4・6 平面・セクション図

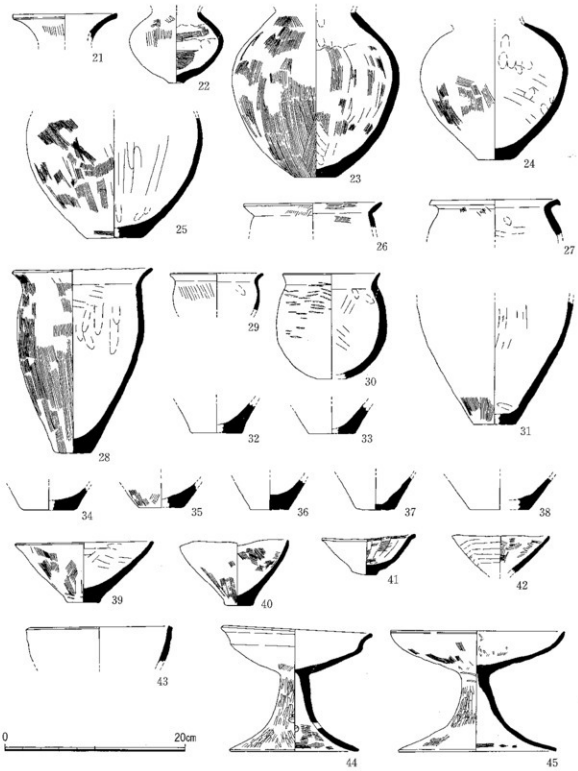


Fig.11　ST 3 出土遺物実測図

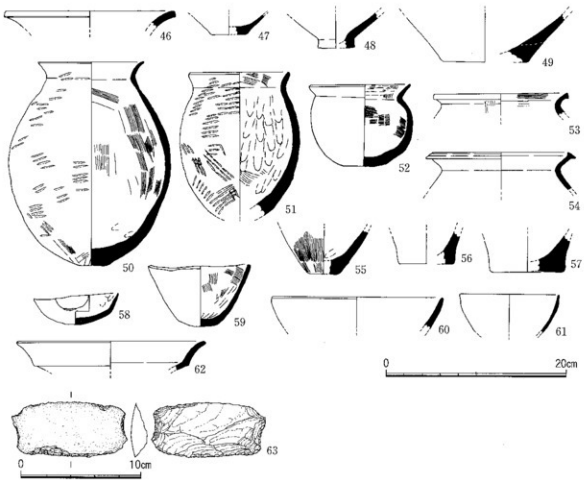


Fig.12　ST 4 出土遺物実測図

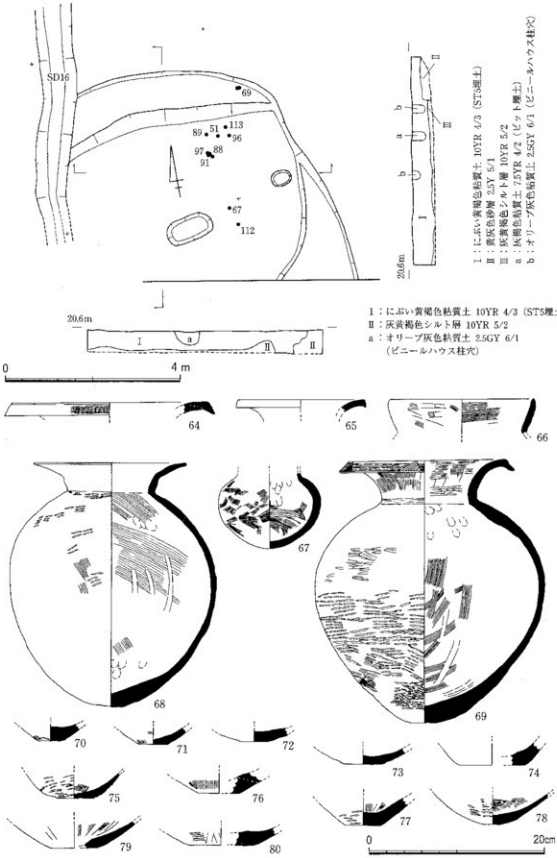


Fig.13　ST 5 平面・セクション・出土遺物実測図

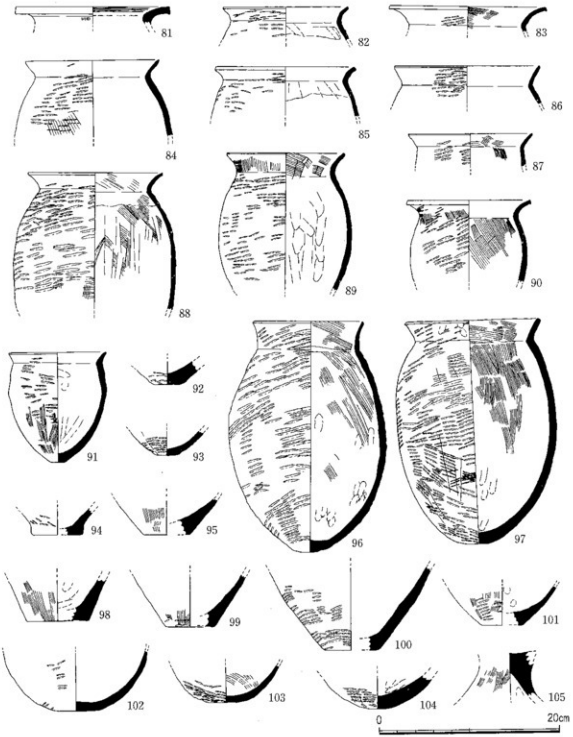


Fig.14　ST 5 出土遺物実測図

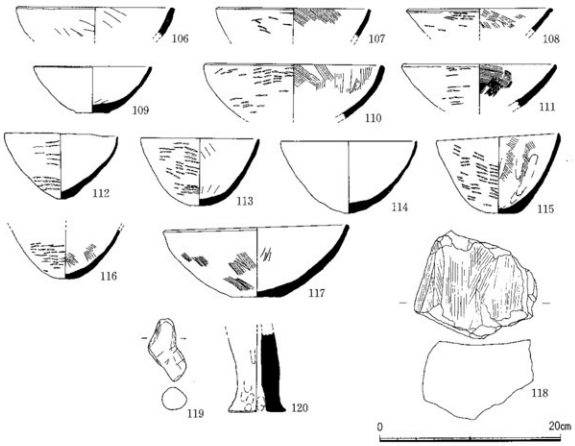


Fig.15　ST 5 出土遺物実測図

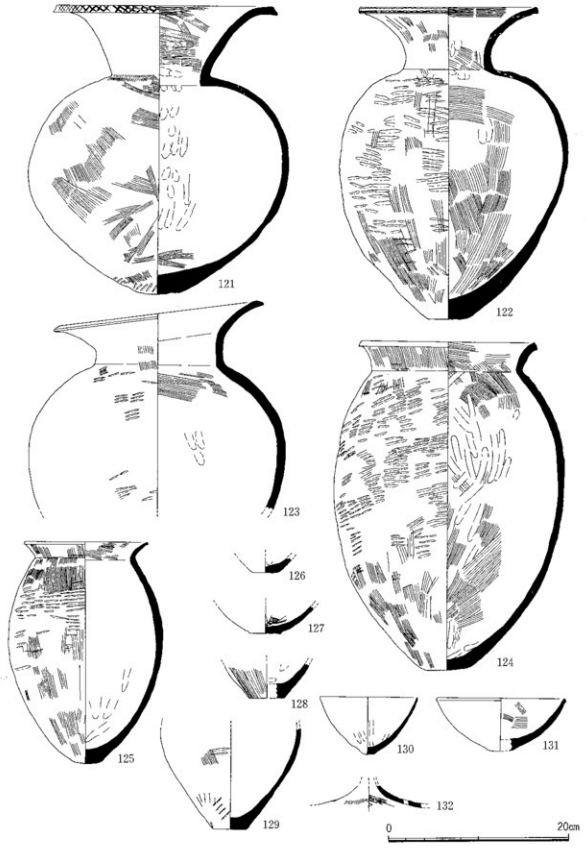


Fig.16　ST 6 出土遺物実測図

ST 7 （Fig.17）

Ⅵ－２区中央部下層で検出された一辺が約5.6mの方形を呈する竪穴住居址である。検出面から床面までの深さは40cm前後を測る。ベッド状遺構は、四方に認められ、地山削り出しによるしっかりした段部を有している。高床部の幅は104cm前後、高さは10～15cmを測る。中央ピットは中心部やや南側に位置し、東西方向に主軸を置く長楕円形を呈している。長軸は136cm、短軸は64cm、深さは23cmを測る。埋土はⅠ層：黒色粘質土（7.5YR2/1）、Ⅱ層：灰黄褐色粘質土（10YR4/2）である。Ⅱ層には一部炭化物を含んでいた。

出土遺物は図示した60点（壺：133～155、甕：156～176、鉢：177～184、高坏：185～187、鉄鏃：188、支脚：189～192）がST 7 に伴うものである。そのうち134・156・159・166・176・177・179・182・183・189・191は床上10cm程の埋土中より出土し、152・163・164は床面より出土した。それ以外の遺物は埋土中よりの出土であるが、高坏（185・186）は後期前葉に属する混入品である。ST 7 は弥生時代後期終末に属する。

ST 8 （Fig.19）

Ⅵ－３区西部で検出された一辺が5.2mの方形の竪穴住居址である。ST 9 に切られており、住居址の南半分は調査区外のため明らかにすることができなかった。検出面から床面までの深さは15cm程であり、埋土は灰褐色粘質土(7.5YR5/2)の単純一層である。住居址の中央部では２ヶ所で楕円形状に炭化物が厚さ約１cm程堆積していた。北側コーナー部にあるＰ１・Ｐ２はその規模からST 8 に付属する貯蔵穴と考えられる。Ｐ１は56×38cm、深さ38cmの隅丸方形で、Ｐ２は径90cm程の不整形な掘形をもつ深さ51cmのピットである。Ｐ２の壁面および床面には10～15cm程の礫を敷いていた。

出土遺物は図示した34点（壺：193～197、甕：198～213、鉢：214～223、支脚：224・225、甑：226）がST 8 に伴うものである。そのうち193・195・198・202・208・211・213・214・217・219・221・224・226は床面よりの出土である。これら床面出土の一括性の高い遺物によりST 8 は弥生時代後期終末に属すると考えられる。

ST 9 （Fig.19）

Ⅵ－３区西部で検出された一辺が9.3mの方形の竪穴住居址で、ST 8 ・10を切っている。ただし、北辺のプランが中央部でクランク状に折れ曲がっており、２棟の住居址が切り合っている可能性を残す。精査したが埋土に違いが認められず、遺物にも時期差がなかったため、ここでは１棟の住居址として報告する。検出面から床面までの深さは10～15cmを測り、埋土は褐灰色粘質土（7.5YR5/1）である。ST 9 に伴うピットは２個検出された。Ｐ１は東西方向に主軸を置く楕円形で、長軸69cm、短軸60cm、深さ17cmを測る。ピットの検出面より１～３cmの厚さで炭化物が含まれていた。Ｐ２は径34cmの円形で深さ25cmを測る。

出土遺物は図示した19点（壺：227・228、甕：229～232、鉢：233～238、高坏：239～241、支脚：242～245）がST 9 に伴うものである。そのうち229・235・239・241・243・244は床面よりの出土である。ST 9 は古墳時代初頭に属する。

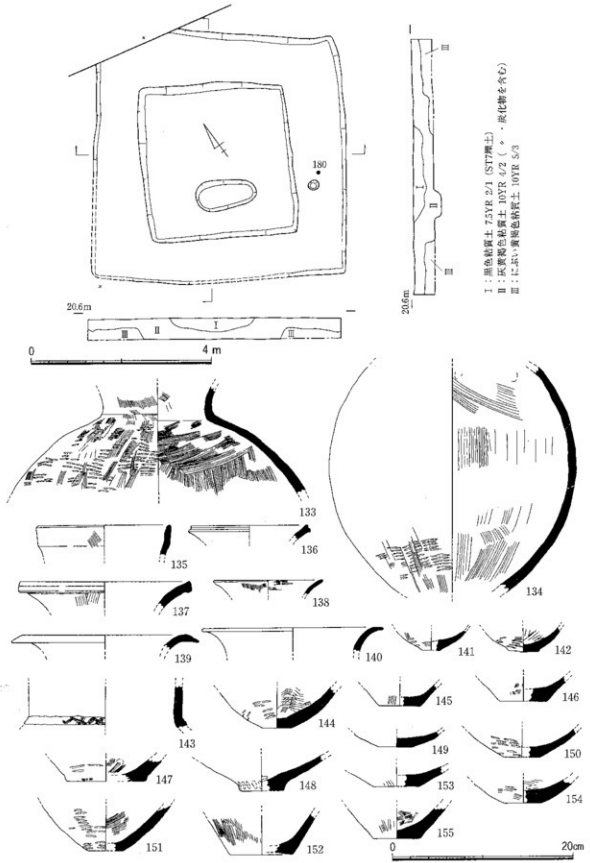


Fig.17　ST７平面・セクション・出土遺物実測図

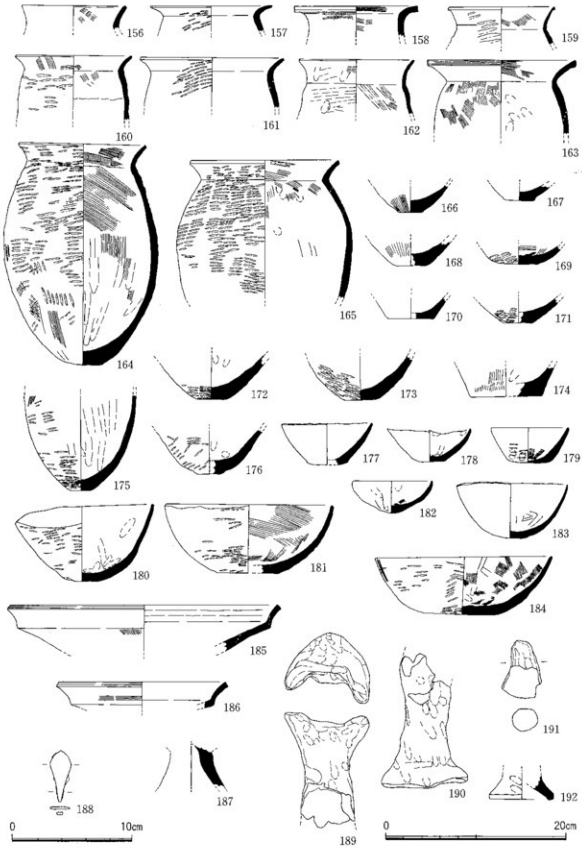


Fig.18　ST 7 出土遺物実測図

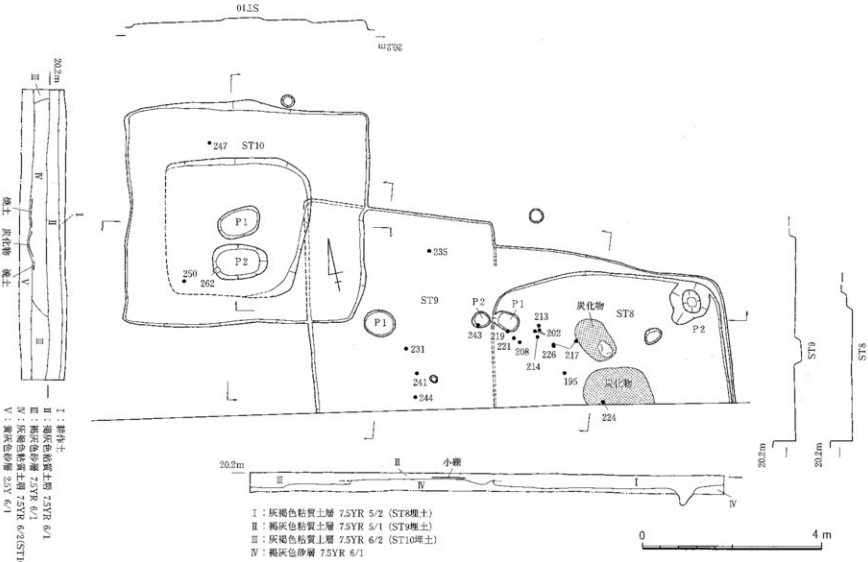


Fig.19　ST 8 ～10平面・セクション・エレベーション図

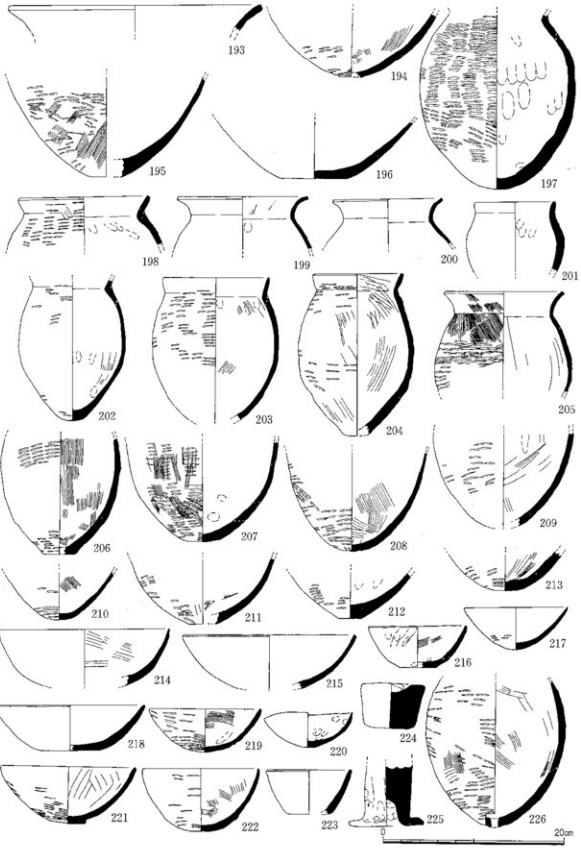


Fig.20　ST 8 出土遺物実測図

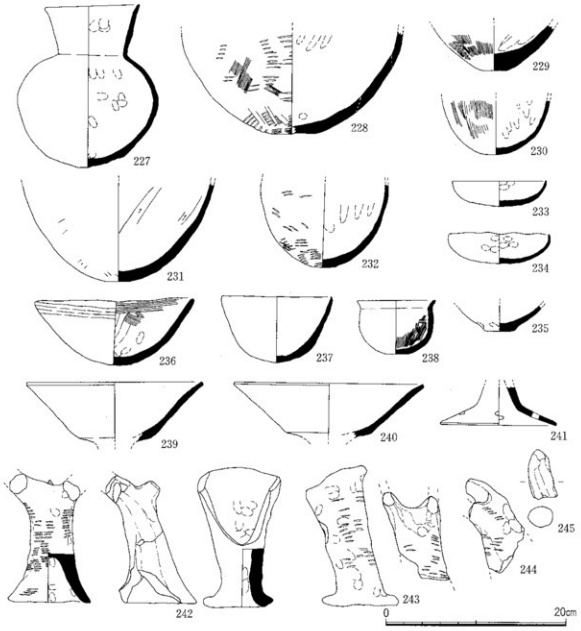


Fig.21　ST 9 出土遺物実測図

ST10（Fig.19）

Ⅵ－３区西部で検出された南北4.9m、東西5.3mの方形の竪穴住居址で、ST９に切られている。検出面から床面までの深さは18cm前後であり、埋土は灰褐色粘質土（7.5YR6/2）の単純一層である。ベッド状遺構は北・東面ではしっかりした段部を有するが、南・西面では高まりが認められなかった。高床部の幅は106cm前後、高さは７cm程を測る。低床部中央では２個の長楕円形のピットが検出された。Ｐ１、Ｐ２ともに東西方向に主軸を置き、底面で１～３cmの厚さで炭化物を含んでいた。規模はＰ１で長軸96cm、短軸62cm、深さ５cmを測り、Ｐ２で長軸122cm、短軸74cm、深さ12cmを測る。Ｐ２の周縁部からは砥石（262）が出土した。

出土遺物は図示した14点（壺：246、甕：247～250、手捏ね：251～254、鉢：255～259、土玉：260、砥石：261・262）がST10に伴うものである。そのうち246・247・250・261は床面よりの出土である。ST10は弥生時代後期終末に属する。

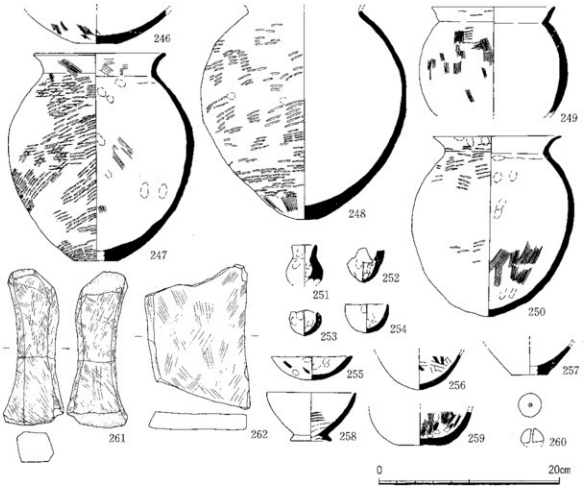


Fig.22　ST10出土遺物実測図

② 土 坑

SK 5 (Fig.23)

Ⅵ－1区東部下層で検出された土坑で、SK 6に切られている。南北に主軸を置く長方形を呈し、長軸188cm、短軸154cm、深さ20cmを測る。底部は平坦で、断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色粘質土の単純一層である。

出土遺物のうち図示し得たのは甕（263・264）である。SK 5は弥生時代前期後葉に属する。

SK 6 (Fig.23)

Ⅵ－1区東部下層で検出された土坑で、SK 5を切っている。南北に主軸を置く長方形を呈し、長軸354cm、短軸196cm、深さ28cmを測る。北辺のプランは、精査したが明確にすることができなかった。底部は平坦で、断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい褐色粘質土であるが、中層の一部に焼土を含み、中層から床面にかけて6～10cm程の炭化物が一面を覆うように出土した。

出土遺物のうち図示し得たのは壺（265）、甕（266）である。SK 6は弥生時代前期末に属する。

SK11 (Fig.23)

Ⅵ－2区中央部上層で検出された土坑で、SD10によって北半分を切られている。南北に主軸を置く楕円形で、検出部は長軸126cm、短軸82cm、深さ30cmを測る。断面形は逆台形で、埋土は褐灰色粘質土（7.5YR4/1）である。

出土遺物のうち図示し得たのは壺（267～269）、甕（270）である。SK11は弥生時代後期終末に属する。

SK12 (Fig.23)

Ⅵ－3区西部で検出された土坑で、南側は調査区外である。平面形は隅丸方形を呈し、検出規模は南北219cm、東西255cm、深さ12cmを測る。埋土は灰褐色粘質土（7.5YR4/2）で、底面は中心部がやや盛り上がり、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物のうち図示し得たのは甕（271）、高坏（272）、支脚（273）である。SK12は弥生時代後期終末に属する。

SK13 (Fig.23)

Ⅵ－3区東部で検出された土坑で、SD17によって東側を切られている。平面形は隅丸方形を呈し、検出規模は南北206cm、東西130cm、深さ28～38cmを測る。底部は概ね平坦であるが、中央部で一段と深く掘り込まれている。埋土は灰黄褐色粘質土（10YR5/2）の単純一層である。

出土遺物のうち図示し得たのは壺（274～276）、甕（277～283）、鉢（284）、甑（285）である。甕（280）は胎土が灰褐色であり、県西部からの搬入品である。SK13は古墳時代初頭に属する。

③ 壺 棺

壺棺1 (Fig.25)

Ⅵ－2区東部のST 4の上面で出土した壺棺（286）である。墓壙は精査したが確認できなかった。上胴部が下胴部に落ち込んだ様な状態で出土した。にぶい褐色の堅緻な胎土は角閃石を含み、讃岐平野よりの搬入品の可能性が強い。内外面に不定方向の粗いハケ調整を施す。壺棺1は弥生時代後期終末に属する。

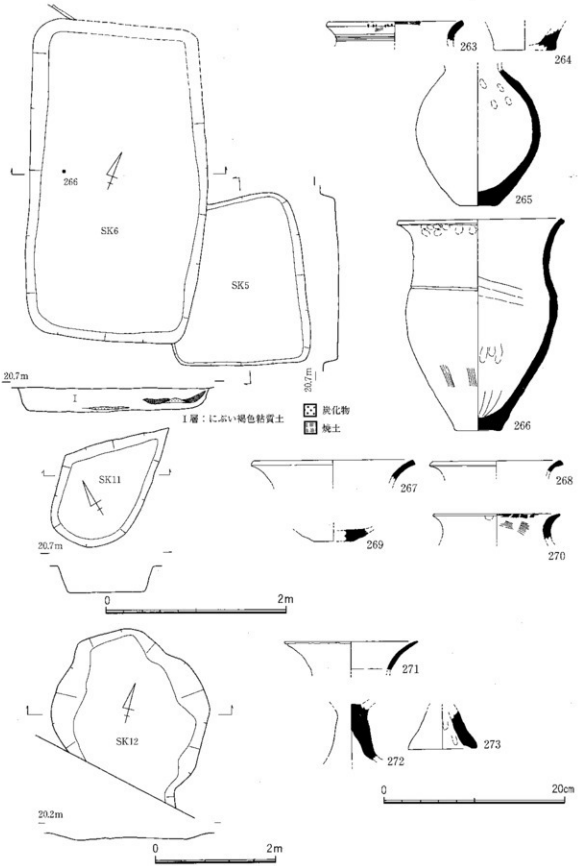


Fig.23　SK 5 ・ 6 ・11・12平面・セクション・エレベーション・出土遺物実測図

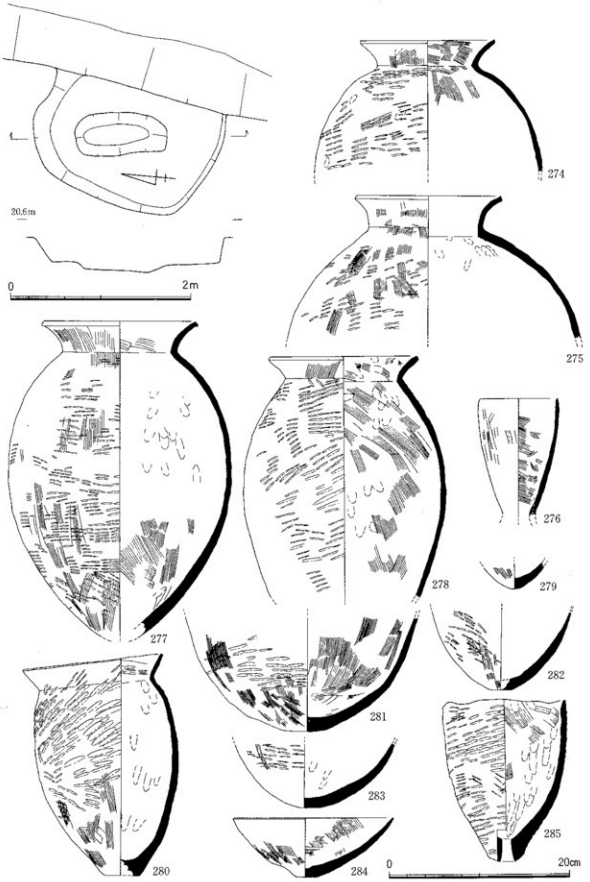
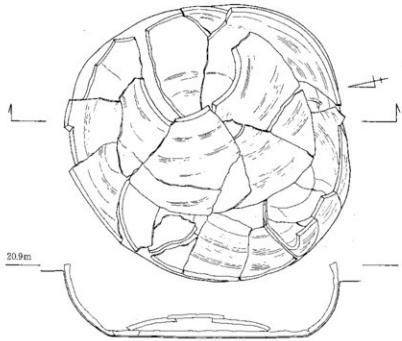


Fig.24　SK13平面・エレベーション・出土遺物実測図



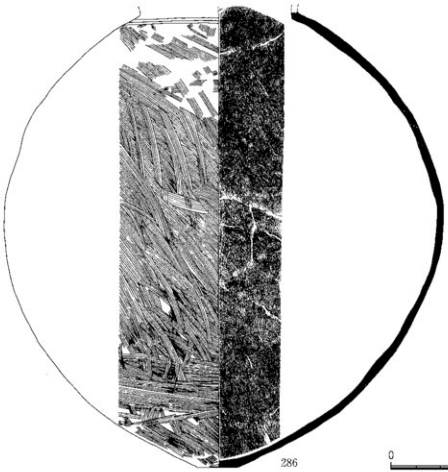


Fig.25　壺棺1出土状況・平面・エレベーション・実測図

壺棺２（Fig.26）

Ⅵ－２区東部のST６の上面で出土した壺棺（287）である。細片が散在した状態で出土し、墓壙を確認することはできなかった。平底から内湾気味に立ち上がり、胴部外面の上位はハケ、ヘラ磨き、中位～下位は叩き、ハケ調整を施す。内面は不定方向の粗いハケ調整を施す。頸部に斜格子状の刻目を施す突帯を貼付している。壺棺２は弥生時代後期終末に属する。

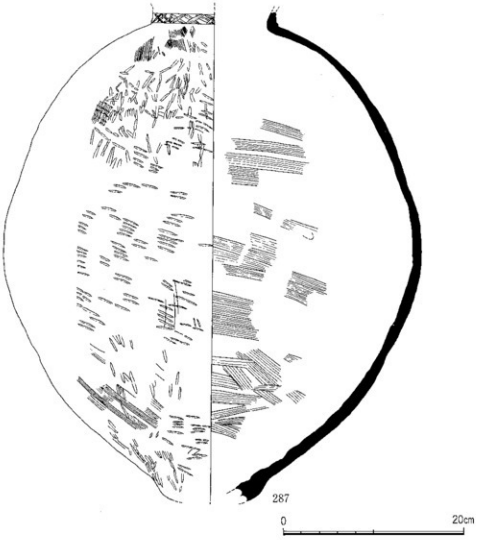


Fig.26　壺棺２実測図

③ 溝

SD３（Fig.27）

Ⅵ－１区西部下層で検出された南北方向（N－15°－E）の溝である。確認延長は4.4m、幅35cm、検出面からの深さは10cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色粘質土である。

遺物は弥生時代後期の土器細片が少量出土しているが、図示できるものは無い。

SD６（Fig.27）

Ⅵ－１区中央部下層で検出された南北方向（N－65°－E）の溝である。確認延長は6.8m、幅26～68cm、検出面からの深さは24cmを測る。底部は舟底状を呈している。埋土は褐灰色粘質土である。

遺物は弥生時代後期の土器細片が少量出土しているが、図示できたものは甕（290）のみである。

SD７（Fig.27）

Ⅵ－１区東部下層で検出された南北方向（N－28°－E）の溝である。確認延長は6.6m、幅46～154cm、検出面からの深さは26cmを測る。南部で二股に分かれ、底部は舟底状を呈している。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は弥生時代後期の土器細片が少量出土しているが、図示できるものは無い。

SD12（Fig.27）

Ⅵ－２区中央部下層で検出された東西方向（N－63°－W）の溝である。長さ2.5m、幅30cm、検出面からの深さは24cmを測る。断面形は逆台形を呈している。埋土は褐灰色粘質土（7.5YR5/1）である。

遺物は弥生時代後期の土器細片が少量出土しているが、図示できるものは無い。

SD13（Fig.27）

Ⅵ－２区東部上層で検出された南北方向（N－23°－E）の溝である。南部では西へ折れ曲がる。SD10に切られ、SD14を切っている。確認延長は9.5m、幅86～146cm、検出面からの深さは32cm前後を測る。底部は舟底状を呈している。埋土はにぶい褐色粘質土（7.5YR5/3）である。

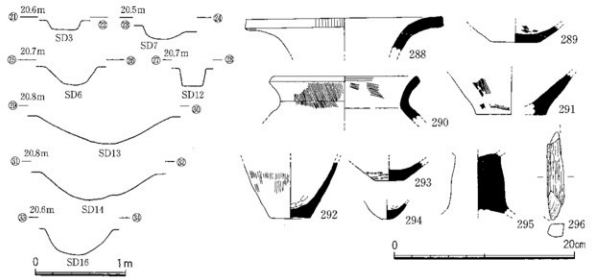


Fig.27　SD３・６・７・12～14・16エレベーション・出土遺物実測図

SD６（290）SD13（291・292・296）SD14（288・289・293～295）

遺物は弥生時代後期の土器細片が少量出土しており、図示できたのは甕（291・292）、砥石(296)である。

SD14（Fig.27）

Ⅵ－２区東部上層で検出された東西方向（Ｎ－88°－Ｅ）の溝である。SD13・15に切られている。確認延長は8.9m、幅0.8～1.5mで西方へ広がり、検出面からの深さは32cm前後を測る。底部は舟底状を呈している。埋土はにぶい褐色粘質土（7.5YR5/3）である。

遺物は弥生時代後期の土器片が出土しており、そのうち図示できたのは壺（288・289）、甕（293）、手捏ね（294）、支脚（295）である。

SD16（Fig.27）

Ⅵ－２区東部下層で検出された南北方向（Ｎ－12°－Ｅ）の溝であり、ST５を切っている。確認延長は5.4m、幅は80cm、検出面からの深さは26cm前後を測る底部は舟底状を呈している。埋土は灰褐色粘質土（7.5YR5/1）である。

遺物は弥生時代後期の土器細片が少量出土しているが、図示できるものは無い。

（３）古代～近世の遺構と遺物

①　土　坑

SK１（Fig.27）

Ⅵ－１区東端上層で検出された土坑である。平面形は径1.7mの円形を呈し、深さは32cmを測る。断面形を逆台形に掘削した後、厚さ５cmほどのハンダ（繁打）で固めている。床面の中心部を５cmほど掘り下げ、長さ20cmの円礫を据えていた。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物は須恵器の細片が少量混入しているが、図示できるものはない。SK１はハンダを伴うことから近世の土坑である。

SK２（Fig.27）

Ⅵ－１区西部中層で検出された土坑で、SK７を切っておりピットに切られている。平面形は径1.1mの円形を呈し、深さは18cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は茶黄色粘質土である。

出土遺物は土師器の細片が少量出土しているが、図示できるものはない。SK２は古代の土坑と考えられる。

SK３（Fig.27）

Ⅵ－１西端上層で検出された土坑で、ＳＫ８に切られている。平面形は径1.8mの円形を呈し、深さは37cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は、Ⅰ層：黄茶灰色粘質土、Ⅱ層：灰色粘質土、Ⅲ層：灰茶色粘質土（１cmほどの茶色のブロックを含む）である。床面からは拳大～人頭大の円礫が多量出土した。礫の８割は砂岩で、２割はチャートである。礫はこの土坑を廃棄する際、意図的に投げ込まれた可能性が高い。

遺物は弥生時代後期の土器細片と須恵器の細片がわずかに混入しているが、図示できるものはない。SK８に切られていることから、SK３は近世の土坑と考えられる。

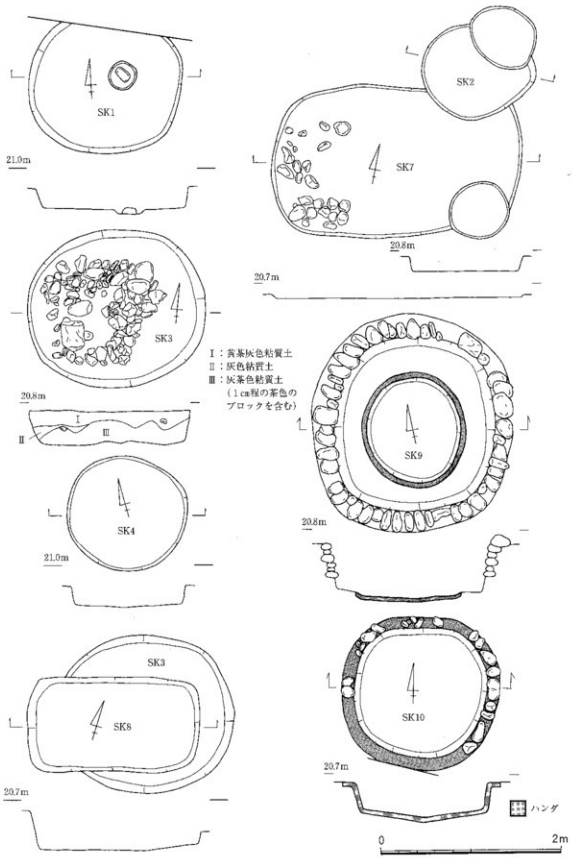


Fig.28　SK 1～4・7～10平面・セクション・エレベーション図

SK 4 (Fig.27)

Ⅵ－１区東端上層で検出された土坑である。平面形は径1.3mの円形を呈し、深さは20cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物は皆無であるが、検出面のレベルから近世のものと考えられる。

SK 7 (Fig.27)

Ⅵ－１区中層で検出された土坑で、SK２、ピットに切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向はＮ－80°－Ｅである。長軸274cm、短軸168cm、深さは６cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土である。西部の床面からは、この土坑を廃棄する際に意図的に投げ込まれたと思われる円礫が集中して出土した。

出土遺物は土師器の細片が少量出土しており、古代の土坑と考えられる。

SK 8 (Fig.27)

Ⅵ－２区西端上層で検出された土坑で、SK３を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向はＮ－82°－Ｅである。長軸190cm、短軸106cm、深さは46cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土はにぶい褐色粘質土である。

遺物は弥生時代後期の土器細片と須恵器の細片がわずかに混入しているが、図示できるものはない。SK８は検出面のレベルから近世のものと考えられる。

SK 9 (Fig.27)

Ⅵ－２区西部上層で検出された土坑で、SD11を切っている。平面形は径2.4mの円形を呈し、深さは56cmを測る。断面形を逆台形に掘削した後、厚さ５cmのハンダで外縁および床面を固めている。上部のハンダで固めた外縁には、拳大の円礫による石組が巡らされている。埋土は灰褐色粘質土(7.5YR5/2)である。

出土遺物は皆無であったが、ハンダを伴うことから近世の土坑である。

SK10 (Fig.27)

Ⅵ－２区中央部上層で検出された土坑である。平面形は径1.7mの円形を呈し、深さは34cmを測る。断面形を逆台形に掘削した後、厚さ５cmのハンダで壁面および床面を固めている。上部のハンダで固めた外縁には、拳大の円礫による列石が巡らされている。埋土は灰褐色粘質土（7.5YR5/2）である。

出土遺物は皆無であったが、ハンダを伴うことから近世の土坑である。

② 溝

SD１ (Fig.29)

Ⅵ－１区東部中層で検出された東西方向（Ｎ－98°－Ｅ）の溝で、SD２に切られている。北半分は調査区外であり、確認できた延長は16.3m、幅2.4m、検出面からの深さは42cmを測る。断面形は逆台形を呈しており、埋土はⅠ層：茶褐色粘質土、Ⅱ層：黄茶褐色粘質土、Ⅲ層：灰褐色砂層である。

出土遺物は須恵器、土師器に弥生時代後期の細片が混入しており、石包丁（297）も出土している。図示し得たのは土師器坏（298）、土師器羽釜（299・300）、須恵器壺（301）、須恵器甕（302）

である。SD１は古代の溝と考えられる。

SD２（Fig.29）

Ⅵ－１区東部中層で検出された南北方向（N－15°－E）の溝で、SD１・SD５を切り、SD４に切られている。確認延長は5.7m、幅1.3m、検出面からの深さは44cmを測る。断面形は逆台形を呈しており、埋土はⅠ層：黄灰色粘質土、Ⅱ層：黄灰褐色粘質土、Ⅲ層：黄灰色粘質土である。

出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器、瓦器などが混在していた。図示し得たのは弥生後期の高坏（303）、須恵器坏（304・306）、須恵器壺（305）、土師器皿（307）、瓦器鍋（308）である。307の外面には刷毛目が残っていた。SD２は古代に属すると考えられる。

SD４（Fig.29）

Ⅵ－１区東部中層で検出された東西方向（N－79°－E）の溝で、SD２・SD８・SD９を切っている。確認延長は4.5m、幅1.1m、検出面からの深さは68cmを測る。底部は舟底状を呈している。埋土はⅠ層：暗灰色シルト層ないし砂層、Ⅱ層：淡灰褐色シルト層、Ⅲ層：茶灰色粘質土、Ⅳ層：茶褐色粘質土である。

遺物は弥生時代後期土器、須恵器、土師器の細片が混在しているが、図示できるものはない。SD４は古代の溝と思われる。

SD５（Fig.29）

Ⅵ－１区東部中層で検出された南北方向（N－43°－E）の溝で、SD２に切られている。確認延長は3.3m、幅1.2m、検出面からの深さは14cmを測る。断面形は緩やかな逆台形を呈し、埋土は灰茶褐色粘質土である。

遺物は出土していない。SD５は古代の溝と思われる。

SD８（Fig.29）

Ⅵ－１区東部中層で検出された南北方向（N－32°－E）の溝で、SD４に切られている。確認延長は1.7m、幅80cm、検出面からの深さは26cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰茶色粘質土である。

遺物は弥生後期土器、須恵器が少量出土しているが、図示できるものは無い。SD８は古代の溝と思われる。

SD９（Fig.29）

Ⅵ－１区東部中層で検出された南北方向（N－32°－E）の溝である。東側のプランは調査区外のため、明らかにすることができなかった。確認できた延長は3.5m、幅72cm、深さ32cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は茶灰色粘質土である。

遺物は出土していない。SD９は古代の溝と考えられる。

SD10（Fig.29）

Ⅵ－２区東部上層で検出された東西方向（N－106°－E）の溝で、SK11・SD13を切っている。確認延長は18.3m、幅66cm、検出面からの深さは29cmを測る。底部は舟底状を呈している。埋土は褐灰色粘質土（7.5YR5/1）である。

遺物は須恵器、土師器が少量出土しているが、図示できるものは無い。SD10は古代の溝と思わ

れる。

SD11（Fig.29）

Ⅵ－２区西部上層で検出された東西方向（Ｎ－66°－Ｗ）の溝で、近世の土坑SK９に切られる。確認延長は4.2m、幅45cm、深さ14cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土（7.5YR 5/1）である。

遺物は土師器の細片が少量出土している。そのうち図示し得たのは小坏（309・310）である。SD11は古代に属すると思われる。

SD15（Fig.29）

Ⅵ－２区東部上層で検出された南北方向（Ｎ－18°－Ｅ）の溝で、SD14を切っている。確認延長は6.9m、幅2.1m、深さは64cmを測る。底部は舟底状を呈しており、西側で段部を形成している。埋土は褐灰色粘質土（7.5YR5/1）である。

遺物は須恵器、土師器、瓦器が出土しており、図示できたのは瓦器鍋（311・312）である。SD15は古代の溝である。

SD17（Fig.29）

Ⅵ－３区東部で検出された南北方向（Ｎ－９°－Ｅ）の溝で、古墳時代初頭の土坑SK13を切っている。確認延長は6.6m、幅1.3～2.2m、深さは87cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰褐色粘質土（7.5YR5/2）である。

遺物は弥生後期土器、須恵器、土師器が出土しており、そのうち図示できたのは土師器坏（313～317）、須恵器高坏（318）、須恵器壺（319）である。SD17は古代の溝である。

調査風景

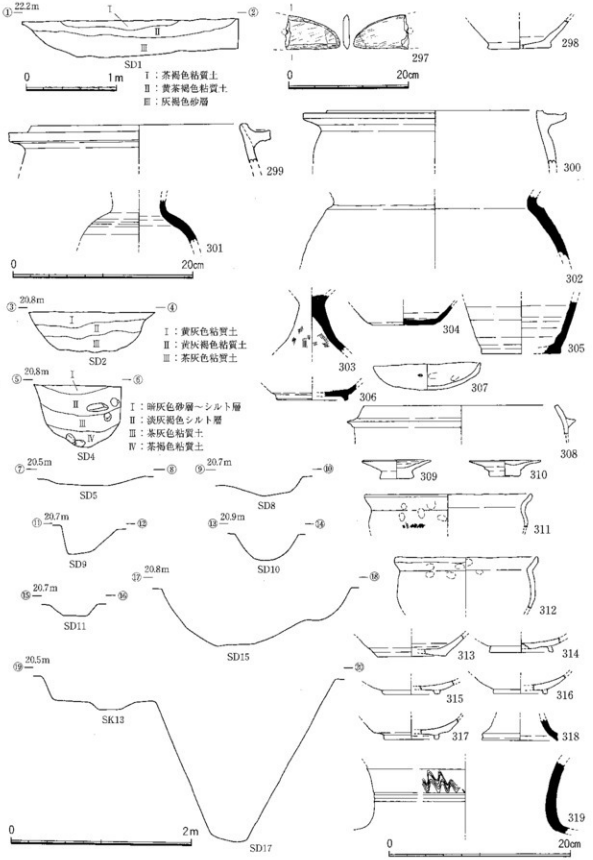


Fig.29　SD1・2・4・5・8～11・15・17セクション・エレベーション・
出土遺物実測図SD1(297・302)　SD2(303～308)　SD11(309・310)　SD15(311～319)

2．Ⅷ区の調査

（1）Ⅷ区の概要（Fig.30）

東西4.5m、南北43m、面積270㎡のⅧ－1区と、東西41.5m、南北6m、面積230㎡のⅧ－2区から成る調査区である。Ⅷ－1区は平成8年度に、Ⅷ－2区は平成9年度に調査を実施した。標高はⅧ－1区で20.3m前後、Ⅷ－2区で20.1m前後を測る。両区とも検出面は浅く、耕作土直下である。

検出遺構は土坑2基、溝6条、柱穴多数である。

（2）検出遺構と遺物

① 土 坑

SK1（Fig.30）

Ⅷ－2区中央部で検出された不整形な土坑で、径115cm、深さ21cmを測る。埋土は灰褐色粘質土（7.5YR5/2）である。

遺物は近世染付、備前擂鉢の細片が少量出土しているが、図示できるものはない。SK1は近世の土坑である。

SK2（Fig.31）

Ⅷ－2区東部で検出された土坑でSD6を切る。不整形な楕円形を呈し、長軸4.2m、短軸2.3m、深さ127cmを測る。埋土は灰褐色粘質土（7.5YR5/2）である。

遺物は石臼の破片が出土したが、図示し得なかった。SK2は近世の土坑である。

② 溝

SD1（Fig.31）

Ⅷ－1区中央部で検出された南北方向（N－56°－E）の溝で、確認延長は7.2m、幅0.4～1.2m、検出面からの深さは32cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土である。

遺物は弥生後期の土器が出土しており、図示できたのは壺（320～325）、甕（326～330）、鉢（331）、高坏（332）、支脚（333）である。

SD2（Fig.31）

Ⅷ－1区北部で検出された東西方向（N－92°－E）の溝で、確認延長は3.1m、幅0.8m、検出面からの深さは21cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土である。

遺物は弥生後期土器の細片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SD3（Fig.31）

Ⅷ－1区中央部で検出された南北方向（N－27°－E）の溝で、確認延長は2.7m、幅0.9m、検出面からの深さは33cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土である。

遺物は弥生後期土器の細片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SD4（Fig.31）

Ⅷ－1区中央部で検出された南北方向（N－60°－E）の溝で、確認延長は3.7m、幅0.9m、検出面からの深さは21cmを測る。断面形は緩やかな逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土である。

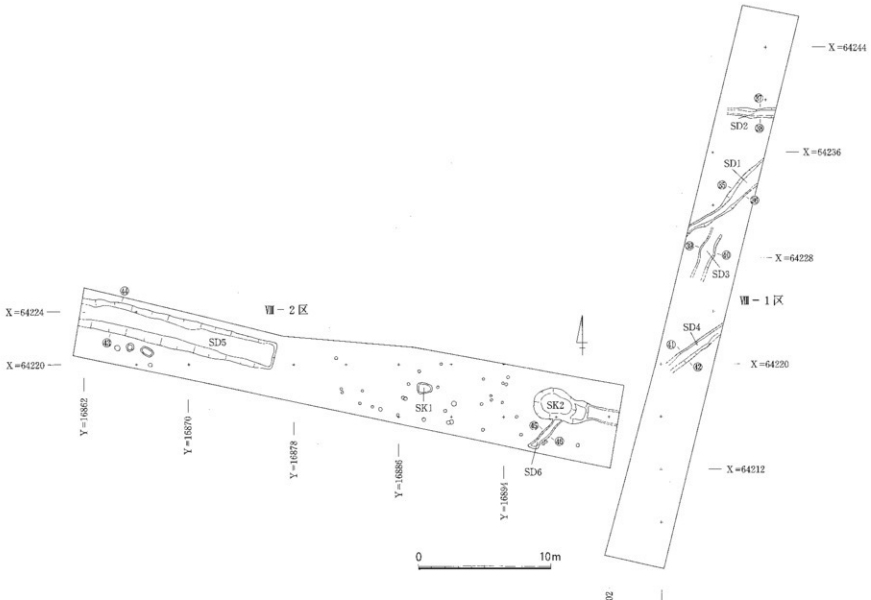


Fig.30　Ⅶ区検出遺構全体図

遺物は弥生後期土器の細片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SD５（Fig.31）

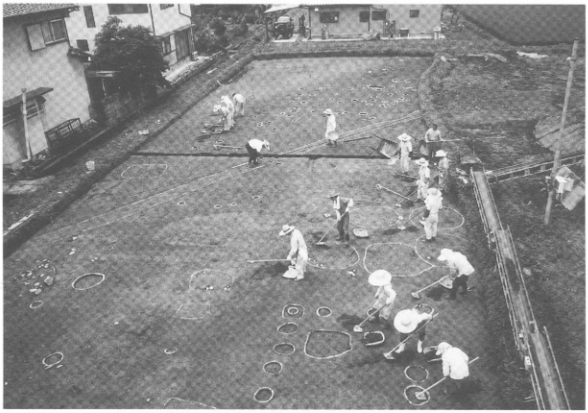
Ⅷ－２区西部で検出された東西方向（N－76°－W）の溝で、確認延長は14.6m、幅2.4m、検出面からの深さは68cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土（7.5YR5/2）である。

遺物は近世染付、備前擂鉢の細片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SD６（Fig.31）

Ⅷ－２区東部で検出された南北方向（N－44°－E）の溝で、SK２に切られている。確認延長は2.9m、幅0.6m、検出面からの深さは21cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土(7.5YR5/2）である。

遺物は弥生後期土器の細片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。



調査風景

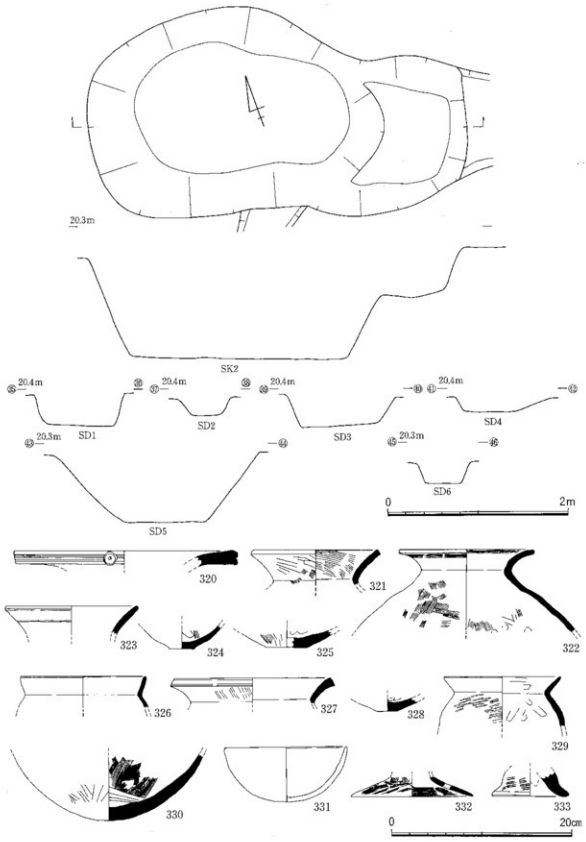


Fig.31　SK２・SD１～６平面・エレベーション・SD１出土遺物実測図

3．X区の調査

（1）X区の概要（Fig.32）

I区の北側に隣接する調査区で、平成9年度に調査した。調査面積は2,320㎡、標高は19.9m前後である。現況の水田の畦畔を利用してX－1～5区に区分した。X－1区は南北22.5m、東西13.5m、面積308㎡である。X－2区は南北11m、東西13m、面積143㎡である。X－3区は南北40.5m、東西13.5m、面積547㎡である。X－4区は南北26m、東西31m、面積806㎡である。X－5区は南北18m、東西27.5m、面積495㎡である。各区とも遺構検出面は浅く、耕作土直下である。

検出遺構は土坑45基、溝5条、柱穴多数で、いずれも近世の遺構である。

（2）検出遺構と遺物

X区の遺構はいずれも近世のものであり、下記の表に示すとおりである。

遺構名	調査区	規　模	形	覆　土	出 土 品	備　考
SK 1	X－1	径70cm、深さ10cm	円形	B（ハンダを伴う）	な　し	
SK 2	〃	120×94cm、深さ17cm	方形	B	〃	
SK 3	〃	167×143cm、深さ12cm	〃	〃	〃	
SK 4	〃	径88cm、深さ18cm	円形	〃	鉄釘、青磁碗、灰釉碗	拳大の礫を含む
SK 5	〃	106×74cm、深さ8cm	隅丸方形	〃	な　し	
SK 6	〃	径80cm、深さ18cm	円形	〃	〃	
SK 7	〃	径138cm、深さ35cm	〃	〃	平瓦	
SK 8	〃	392×180cm、深さ50cm	長方形	〃	な　し	SK10を切る
SK 9	〃	340×102cm、深さ38cm	〃	染付皿	拳大の礫を含む	
SK10	〃	径115cm、深さ46cm	隅丸方形	〃	な　し	
SK11	〃	105×92cm、深さ58cm	方形	〃	〃	SK 8・SK 9を切る
SK12	〃	径184cm、深さ11cm	円形	〃		人頭大の礫を含む
SK13	〃	259×162cm、深さ51cm	隅丸長方形	〃	〃	SK 1 4を切る
SK14	〃	一辺314cm、深さ23cm	隅丸方形	A	〃	
SK15	〃	152×102cm	〃	〃	〃	
SK16	〃	径66cm、深さ21cm	円形	B		
SK17	〃	112×100cm、深さ29cm	方形	〃	灰釉碗	拳大～人頭大の礫を含む
SK18	〃	210×144cm、深さ54cm	楕円形	B（ハンダを伴う）	染付皿・碗、平瓦	拳大の礫を含む
SK19	〃	径156cm、深さ49cm	円形	B（ハンダを伴う）	青磁碗・平瓦	〃
SK20	〃	径148cm、深さ46cm	〃	B（ハンダを伴う）	染付筆・碗、灰釉碗、平瓦	〃
SK21	〃	一辺290cm、深さ49cm	方形	B	鉄釉板・平瓦	人頭大の礫を含む
SK22	X－2	径165cm、深さ57cm	円形	A（ハンダを伴う）	な　し	
SK23	〃	径210cm、深さ26cm	〃	〃	〃	SD 2を切る
SK24	X－3	一辺96cm、深さ16cm	方形	A（ハンダを伴う）	〃	外縁に人頭大の礫による石組
SK25	〃	径102cm、深さ20cm	円形	A（ハンダを伴う）	〃	
SK26	〃	114×74cm、深さ8cm	隅丸長方形	B	〃	
SK27	〃	径164cm、深さ60cm	円形	B（ハンダを伴う）	染付碗	SK28を切る
SK28	〃	径176cm、深さ66cm	〃	A（ハンダを伴う）	染付碗・皿、青磁碗	
SK29	〃	径148cm、深さ44cm	〃	A（ハンダを伴う）	染付碗・蓋、灰釉碗、鉄釉碗	
SK30	〃	径146cm、深さ34cm	〃	B（ハンダを伴う）	染付碗、瀬戸焙烙	
SK31	〃	径164cm、深さ48cm	〃	B（ハンダを伴う）	平瓦	SK32を切る
SK32	〃	254×184cm、深さ12cm	方形	A	な　し	
SK33	〃	212×82cm、深さ18cm	隅丸長方形	〃	〃	SD 3を切る
SK34	〃	380×233cm、深さ43cm	楕円形	〃	染付碗、平瓦	
SK35	〃	径64cm、深さ24cm	円形	B	な　し	SK36を切る
SK36	〃	径151cm、深さ38cm	〃	〃	〃	SK37を切る
SK37	〃	径83cm、深さ37cm	〃	〃	〃	
SK38	〃	径153cm、深さ28cm	円形	A（ハンダを伴う）	〃	外縁に拳大の礫による石組
SK39	〃	径84cm、深さ34cm	〃	B	〃	SK40を切る
SK40	〃	164×122cm、深さ25cm	方形	A（ハンダを伴う）	〃	
SK41	〃	128×72cm、深さ8cm	〃	A	〃	
SK42	〃	122×87cm、深さ20cm	楕円形	〃	染付碗・蓋・徳利、灰釉碗	
SK43	〃	157×64cm、深さ20cm	不整形	〃	な　し	

遺構名	調査区	規　模（延長×幅×深さ）	断面形	覆　土	出 土 品	備　考
SD 1	X－1	11.4m×30～175cm×12cm	逆台形	B	な　し	拳大の礫を含む
SD 2	X－2	4.3m×42cm×23cm	〃	B	平瓦	
SD 3	X－3	2.5m×40cm×8cm	〃	A	な　し	
SD 4	〃	19.7m×74cm×10cm	〃	A	〃	床面は鉄分を含む
SD 5	X－5	7.9m×40～210cm×14cm	〃	B	〃	

埋土A：暗褐色粘質土（7.5YR3/4）
埋土B：灰褐色粘質土（7.5YR5/2）

Fig.32　X区検出遺構全体図

4．XI区の調査

（1）XI区の概要（Fig.33）

全調査区中最西の調査区で、平成9年度に調査した。調査面積は1,124㎡、標高は19.4m前後である。現況の水田の畦畔を利用してXI－1、XI－2区に区分した。XI－1区は南北54.8m、東西51.4m、面積466㎡である。XI－2区は南北54m、東西12.2m、面積658㎡である。各区とも遺構検出面は浅く、耕作土直下である。

検出遺構は土坑14基、溝1条、柱穴多数で、いずれも近世の遺構である。

（2）検出遺構と遺物

XI区の遺構はいずれも近世のものであり、下記の表に示すとおりである。

遺構名	調査区	規　模	形	埋　土	出土品	備　考
SK 1	XI－1	径225cm、深さ61cm	円形	B	備前甕、瓦質火入	
SK 2	〃	160×70cm、深さ44cm	隅丸長方形	A	な　し	
SK 3	〃	245×120cm、深さ50cm	〃	B	備前擂鉢、鉄釘	
SK 4	〃	430×390cm、深さ34cm	楕円形	〃	染付皿、備前甕	
SK 5	〃	165×105cm、深さ31cm	隅丸方形	〃	な　し	
SK 6	〃	径210cm、深さ10cm	円形	〃	〃	
SK 7	〃	径165cm、深さ55cm	〃	B（ハンダを伴う）	〃	
SK 8	XI－2	185×70cm、深さ18cm	不整形	B	〃	
SK 9	〃	径95cm、深さ14cm	円形	〃	〃	
SK10	〃	径155cm、深さ50cm	〃	〃	〃	
SK11	〃	径170cm、深さ53cm	〃	〃	〃	
SK12	〃	径190cm、深さ57cm	〃	〃	〃	
SK13	〃	径165、深さ29cm	〃	〃	〃	
SK14	〃	径185cm、深さ85cm	〃	〃	〃	
SD 1	XI－1	410×140cm、深さ49cm	断面－逆台形	〃	青磁碗、染付急須	

埋土A：暗褐色粘質土（7.5YR3/4）
埋土B：灰褐色粘質土（7.5YR5/2）

現地説明会

発掘調査に携わった人たち

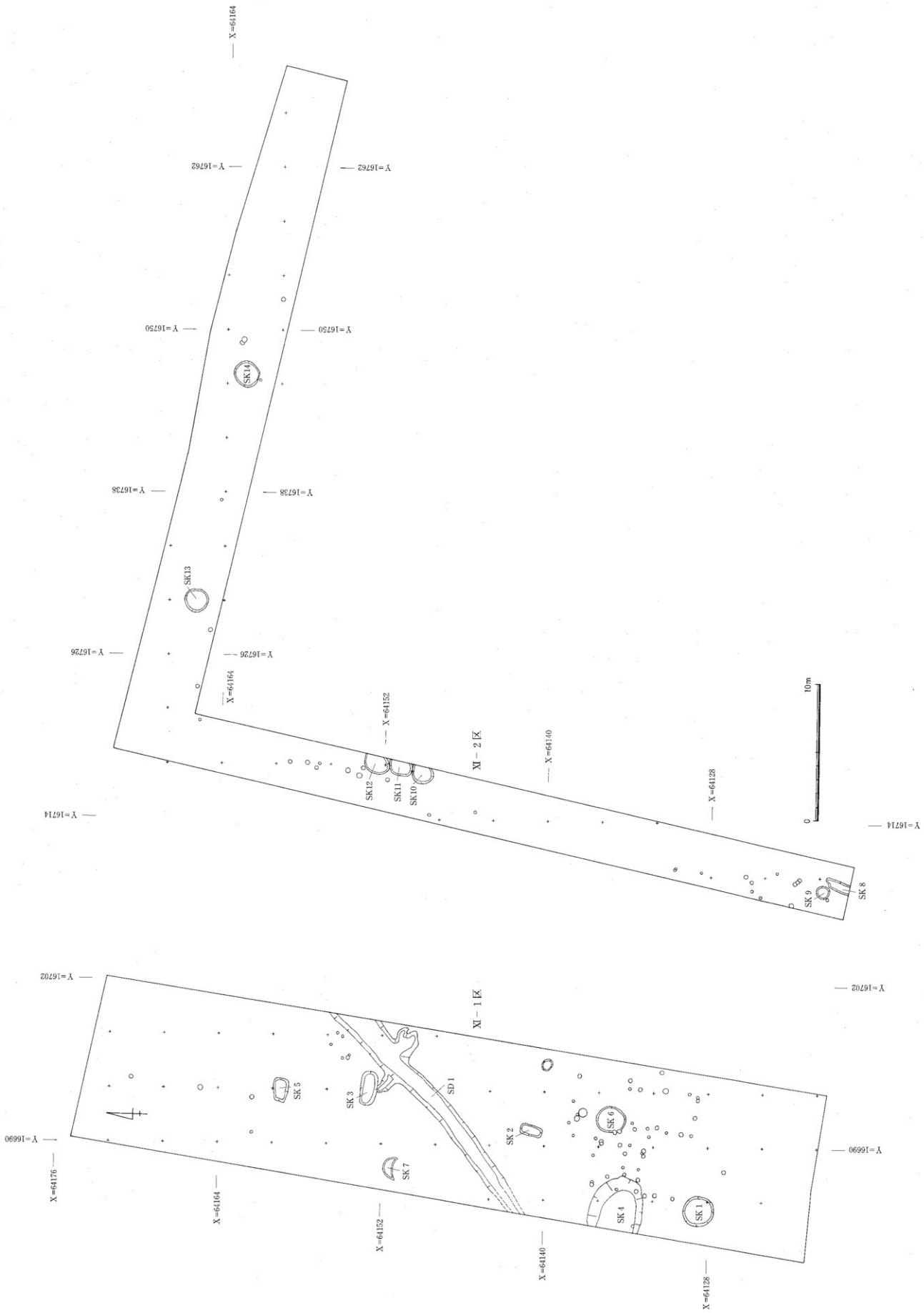


Fig.33　XI区検出遺構全体図

第Ⅳ章　考　察

弥生時代から古墳時代初頭の岩村遺跡群

（1）はじめに

今次報告のⅥ区からは弥生～古墳時代初頭の遺構・遺物が数多く出土した。竪穴住居３棟を検出したⅡ区とⅥ区は現農道を１本隔てた所に位置し、両調査区は一体の集落を形成していたと思われる。ここではそれらの成果から、弥生～古墳時代初頭にかけての集落としての岩村遺跡群について検討してみたい。

（2）弥生時代前期末

岩村遺跡群で確認された最古の遺構は、Ⅵ－１区のSK５で弥生時代前期後葉のことであり、縄文時代以前に遡る遺構・遺物は全く出土していない。高知平野における弥生前期の土器編年は４小期に区分することができ(1)、少量ながらSK５・６から出土している遺物は前期末葉の４期に該当するといえよう。同様の遺構は田村遺跡群でも数例確認されており(2)、貯蔵穴としての性格が考えられる。SK６は床一面に多量の炭化物と焼土を伴っており、貯蔵穴を覆っていた屋根状のものが焼け落ちたものと思われる。

高知平野では前期初頭に田村遺跡群が出現し、以後拠点的母村集落として発展していく一方、周辺部への展開は全く見られない。前期末葉に至り、田村遺跡群の１周辺部はもとより、物部川をはじめ中小河川流域にまで集落遺跡の分布が見られはじめるようになる(3)。岩村遺跡群は土坑２基のみの出土であり、現時点でこの時期に集落が営まれたとすることはできないが、このような一連の動向の中で出現した遺跡として捉えることができる。

（3）弥生時代後期～古墳時代初頭

岩村遺跡群では弥生時代中期の遺構は全く認められなかったが、Ⅱ区の包含層より中期前～中葉の壺・甕が出土している(4)。後期に至ると俄に竪穴住居を伴う集落が形成される。竪穴住居はⅡ区で３棟、Ⅵ区で10棟確認され、いずれも弥生時代後期から古墳時代初頭に属しており、この時期を岩村遺跡群の盛況期とすることができる。

出土した土器により竪穴住居の変遷を検討してみると、先ず後期前半にⅡ区でST２が出現し、後期中葉にⅥ区のST３、後期終末にⅡ区のST３、Ⅵ区のST１・２・４～８・10が営まれ、古墳時代初頭にⅡ区のST１、Ⅵ区のST９が営まれる。高知平野の弥生後期土器編年は、長頸壺・叩き成形の出現、内面ヘラ削りの残存、「土佐型甕」の消滅などの特徴を示す前半と、叩き成形が顕在化し、甕と小型の鉢が盛行する後半に大別される。前半は更に４つの小期に、後半は３つの小期に細分することができる(5)。後期前半とした竪穴住居より出土した土器は２期に、後期中葉は３期に、終末は６・７期に該当させることができる。古墳時代初頭は、出原恵三氏の編年の古式土師器Ⅰ期(6)に属する。これを器種ごとの組成割合で見ると、甕が全体の半数近く（47.6%）を占め、次いで壺（22.5%）、鉢（21.7%）となり、高坏と支脚は合わせても１割に満たない。これは後期になると壺は減少の一途を辿り（２～３割）、甕と鉢が大半を占める高知平野の一般的な動向に当てはまる。なお、Ⅵ区の点数については実測し得たもののみを計数しており、細片を含めると、甕・鉢の割合

は更に高まるといえる。

高知平野の弥生集落は、前期初頭から後期に至るまで拠点集落として栄えていた田村遺跡群と、その周辺部に比較的短時間、そして断続的に営まれる分村的集落をもって常に理解される。田村遺跡群は昭和55～58年の調査と、現在調査中のものを合わせた竪穴住居の数は390棟余りが検出されている(7)。集落は前期の環濠集落から数度の移動を繰り返しながら、中期後半から後期中葉にかけてピークを迎え、後期後葉になると急速に衰退し、古墳時代を待たずに廃絶されている。一方で、周辺部の中小集落は後期中葉から終末にかけて成立し、高知平野一帯に爆発的に展開し、古墳時代初頭まで営まれる。出原氏はこれらの集落を「短期膨張衰退型」として詳しく検討し、それに二つのパターンを見い出している(8)。すなわち、一つは後期終末から古墳時代初頭（古式土師器Ⅰ期）まで営まれ、比較的水辺から離れた所に立地するのに対し、もう一つは後期中葉から成立して継続時期がやや長く（古式土師器Ⅱ期あるいはそれ以降）、水運に密接な立地状況を示し、複数地域からの搬入土器を伴うものとしている。前者の類例はひびのき遺跡(9)、ひびのきサウジ遺跡(10)、林田遺跡(11)、金地遺跡(12)、栄エ田遺跡(13)が挙げられ、後者の類例は拝原遺跡(14)、深淵遺跡(15)、五軒屋敷遺跡(16)、下ノ坪遺跡(17)、小籠遺跡(18)などが挙げられる。岩村遺跡群は古式土師器Ⅰ期段階までしか継続していないものの、他の条件は満たしており、後者に属しているといえよう。特にⅥ区出土の壺棺は大型であり、讃岐からの搬入には水運が不可欠だったであろう。弥生時代の遺構が集中したⅡ・Ⅵ区は、周囲より1～1.5mほど高い旧物部川による自然堤防上に立地しており、物資の搬出入、日常生活における水資源の確保の容易さに加え、水害を避ける上でも好適地であったといえる。

	時　代	壺（%）	甕（%）	鉢（%）	高坏（%）	支脚（%）	点数　計
Ⅱ区ST 1	古墳時代初頭	11(23.9)	14(30.4)	17(37.0)	4(8.7)	0	46
ST 2	弥生時代後期前半	10(16.4)	41(67.2)	7(11.5)	3(4.9)	0	61
ST 3	弥生時代後期終末	1(4.8)	18(85.7)	2(9.5)	0	0	21
Ⅵ区ST 1	〃	0	2(50.0)	2(50.0)	0	0	4
ST 2	〃	2(18.2)	7(63.6)	2(18.2)	0	0	11
ST 3	弥生時代後期中葉	5(20.0)	13(52.0)	5(20.0)	2(8.0)	0	25
ST 4	弥生時代後期終末	4(23.5)	8(47.1)	4(23.5)	1(5.9)	0	17
ST 5	〃	17(30.4)	24(42.9)	12(21.4)	0	3(5.4)	56
ST 6	〃	3(25.0)	6(50.0)	1(8.3)	2(16.7)	0	12
ST 7	〃	23(39.0)	21(35.6)	8(13.6)	3(5.1)	4(6.8)	59
ST 8	〃	5(15.2)	16(48.5)	10(30.3)	0	2(6.1)	33
ST 9	古墳時代初頭	2(10.5)	4(21.1)	6(31.6)	3(15.8)	4(21.1)	19
ST10	弥生時代後期終末	1(10.0)	4(40.0)	5(50.0)	0	0	10
計		84(22.5)	178(47.6)	81(21.7)	18(4.8)	13(3.5)	374

竪穴住居別土器組成表

(註)

(1) 高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　田村遺跡群』第3分冊　1986年
(2) 同　上
(3) 出原恵三「弥生時代から中世における小籠遺跡の変遷」『小籠遺跡Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター　1997年
(4) 出原恵三・武市義浩『岩村遺跡群Ⅱ』南国市教育委員会　1997年
(5) 出原恵三「土佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第四回大会資料　1990年
(6) 出原恵三『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会　1993年
(7) 高知県埋蔵文化財センター『田村遺跡群現地説明会資料』　1999年
(8)　(3) に同じ
(9) 岡本健児・広田典夫『高知県ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会　1977年
(10) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会　1990年
(11) 森田尚宏『林田遺跡』土佐山田町教育委員会　1985年
(12) 吉原達生『金地遺跡』南国市教育委員会　1992年
(13) 松村信博『栄エ田遺跡』高知県埋蔵文化財センター　1995年
(14)　(6) に同じ
(15) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年
(16) 下村公彦・角谷和男『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会　1984年
(17) 出原恵三「下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落」『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会　1998年
(18)　(3) に同じ

遺物観察表 1

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
8	1	Ⅵ－1区 ST 1	甕	12.6	(14.6)	14.8		チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面ハケ、指頭圧痕あり。外面煤ける。	
〃	2	〃	〃	12.2	(6.3)	11.8		チャート・石英の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面粗い縦ハケ。内面粗いハケ調整。	
〃	3	〃	鉢	17.1	5.9		4.8	チャートの粗粒砂・小礫を含む。にぶい橙色。内面ハケ、指頭圧痕あり。外面に大きな黒斑あり。	
〃	4	〃	〃	11.0	5.8		1.0	チャート・石英の粗粒砂を少量含む。浅黄橙色。外面縦ヘラ磨き。内面指ナデ。	
〃	5	〃	叩石	全長 8.3	全幅 7.8	全厚 5.1	重量 464 g	使用痕1面。	砂岩製
〃	6	〃	打製石包丁	全長 4.2	全幅 6.7	全厚 0.7	重量 30 g	両端に抉りあり。	千枚岩製
9	7	Ⅵ－1区 ST 2	壺	21.2	(3.6)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。口縁端部凹状を呈す。	
〃	8	〃	〃	15.0	(3.5)			チャート・石英の粗粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。口唇部に1条の沈線を施す。	
〃	9	〃	甕	14.1	(6.1)			チャート・赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。淡橙色。外面胴上部に叩きあり。口縁部叩き出し。	
〃	10	〃	〃	14.0	(7.1)			チャート・赤色風化礫他の粗・細粒砂を含む。橙色。外面水平方向叩き＋ナデ。胴部上半・頸部内面に粘土層による接合痕を認める。	
〃	11	〃	〃	14.0	(4.2)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内・外面煤ける。頸部外面叩き。頸部内面横ナデ。	
〃	12	〃	〃	14.0	(8.1)			チャート・赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。橙色。頸部断面に接合痕あり。胴部外面水平方向叩き。	
〃	13	〃	〃		(2.9)		6.2	チャートの粗粒砂を含む。内・外面器表の荒れが激しい。胴部下半外面縦ハケ。底部はわずかに上げ底。	
〃	14	〃	〃		(6.0)			チャート・赤色風化礫の細粒砂を含む。橙色。内・外面器表の荒れが激しい。内面ハケ調整。	
〃	15	〃	〃	16.4	25.0	22.1	1.5	チャートの粗・細粒砂を含む。橙色。外面叩き後に縦方向ハケ調整。頸部内外面横ナデ調整。頸部内外面、底部内面に指頭圧痕あり。頸部に稜線、頸部内面に粘土層による接合痕が顕著。	
〃	16	〃	手捏ね	4.1	5.6		2.4	チャートの粗・細粒砂を多く含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。外面に黒斑あり。胴上部内面に指頭圧痕あり。	
〃	17	〃	鉢	13.4	(6.2)			チャートの細粒砂を含む。暗赤褐色。内・外面ハケ調整。	
〃	18	〃	〃	13.0	4.6		3.9	チャート・石英の細粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。胴部外面に黒斑あり。	
〃	19	〃	石器 砥石	全長 21.5	全幅 10.0	全厚 3.9	重量 1005 g	使用痕1面。	砂岩
〃	20	〃	石器 磨製石斧	全長 (12.5)	全幅 (3.2)	全厚 (5.4)	重量 310 g		緑色片岩
11	21	Ⅵ－2区 ST 3	壺	11.6	(3.0)			チャート・石英の細粒砂を含む。にぶい褐色。外面ハケ調整。	
〃	22	〃	〃		(8.0)	10.4	1.7	チャート・石英の粗粒砂を少量含む。外面ハケ、ヘラ磨き。内面ハケ調整。下胴部に黒斑あり。	
〃	23	〃	〃		(18.5)	18.8	4.6	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。内・外面ハケ調整。下胴部に黒斑あり。	
〃	24	〃	〃		(14.9)	16.5	3.5	チャート・石英の細・粗粒砂を含む。灰白色。内・外面ハケ。内面指頭圧痕顕著。下胴部に大きな黒斑あり。	

遺物観察表 2

Fig. No.	掲図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
11	25	Ⅵ－2区 ST 3	甕		(13.4)		6.0	チャートの小礫を少量含む。橙色。外面ハケ、内面指ナデ。	
〃	26	〃	〃	15.4	(3.0)			チャート・石英の粗粒砂を含む。褐灰色。内面ナデ調整。	
〃	27	〃	〃	14.0	(3.9)			チャート・雲母の細・粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	28	〃	〃	15.4	20.5	14.1	4.1	チャートの粗粒砂をわずかに含む。橙色。外面ハケ。内面指ナデ。平底。	
〃	29	〃	〃	10.3	(4.2)			砂粒をほとんど含まない。橙色。外面ハケ、内面ナデ調整。	
〃	30	〃	〃	10.8	11.9	12.4		チャートの粗粒砂を少量含む。灰褐色。外面横ナデ・叩き調整。内面縦方向のナデ。	
〃	31	〃	〃		(13.7)		4.6	チャートの小礫を含む。橙色。内面下から上へのヘラ削り。外面縦方向のハケ。外面に黒斑あり。	
〃	32	〃	〃		(3.3)		5.6	チャートの小礫を含む。灰褐色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	33	〃	〃		(3.1)		5.2	チャートの小礫を含む。明褐灰色。内・外面調整不明。	
〃	34	〃	〃		(3.6)		6.4	チャート・石英・雲母の細・粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	35	〃	〃		(2.8)		5.0	チャートの小礫を含む。褐灰色。外面ハケ調整。	
〃	36	〃	〃		(3.4)		4.2	チャート・石英の粗粒砂、雲母の細粒砂を含む。にぶい赤褐色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	37	〃	〃		(3.7)		4.3	チャート・石英の粗粒砂を多く含む。赤褐色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	38	〃	〃		(3.5)		6.6	チャート・石英の粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。外面に黒斑あり。	
〃	39	〃	鉢	15.1	6.5		3.7	砂粒をほとんど含まない。橙色。内・外面ハケ調整。平底。	
〃	40	〃	〃	12.1	7.1		3.1	チャートの細粒砂を少量含む。橙色。内・外面ハケ調整。	
〃	41	〃	〃	10.4	4.3		2.6	チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。内面横方向のハケ・ナデ調整。外面ナデ調整。平底。	
〃	42	〃	〃	10.8	(4.2)			チャートの細・粗粒砂を少量含む。褐灰色。外面ナデ。内面ヘラ磨き、ハケ。	
〃	43	〃	〃	15.6	(4.1)			砂粒をほとんど含まない。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。口縁部剥取り。	
〃	44	〃	高坏	16.5	13.7		14.6	砂粒をほとんど含まない。橙色。口縁部外面ナデ。脚部外面丁寧なヘラ磨き。脚部内面ハケ。脚柱部調方に穿孔。坏部に黒斑あり。	
〃	45	〃	〃	19.4	13.4		17.5	チャート・石英・雲母の細・粗砂粒を含む。橙色。脚部外面に丁寧なヘラ磨き。脚部内面ハケ。	
12	46	Ⅵ－2区 ST 4	壺	18.8	(1.9)			チャート・石英の粗粒砂を含む。橙色。内・外面調整不明。口頸部剥取り。	
〃	47	〃	〃		(2.2)		4.1	チャート・石英の細・粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	48	〃	〃		(3.8)		4.1	チャート・石英の粗粒砂、小礫を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	

遺物観察表 3

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
12	49	Ⅵ－2区 ST 4	壺		(5.5)		10.0	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	50	〃	甕	11.7	22.8	18.0	3.0	チャートの細・粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面口縁部～下胴位叩き、底部ハケ。内面上胴位～中胴位ハケ、底部に指頭圧痕あり。	
〃	51	〃	〃	11.0	16.1	13.3		チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面口縁部・底部ハケ。胴部は強い指ナデ。	
〃	52	〃	〃	11.0	9.1		3.5	チャートの粗粒砂をわずかに含む。橙色。内・外面ナデ調整。平底。	
〃	53	〃	〃	15.0	(2.5)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面ナデ調整。口唇部面取り。	
〃	54	〃	〃	15.5	(4.2)			チャート・石英の粗粒砂を含む。橙色。内・外面ナデ調整。	
〃	55	〃	〃		(5.0)		3.4	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面粗いハケ。内面指頭圧痕顕著。	
〃	56	〃	〃		(3.5)		6.1	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	57	〃	〃		(4.1)		8.4	チャート・石英の小礫を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	58	〃	鉢	9.5	3.2			チャート・石英の細・粗粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	59	〃	〃	10.9	6.9		3.1	チャート・石英の粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。内面ハケ、ナデ調整。	
〃	60	〃	〃	18.9	(3.5)			チャートの細・粗粒砂を少量含む。浅黄橙色。内・外面調整不明。	
〃	61	〃	〃	11.0	(4.3)			チャート・赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。内・外面の器表の荒れが激しい。黒斑あり。	
〃	62	〃	高坏	20.8	(3.2)			チャート・石英・赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。浅黄橙色。	
〃	63	〃	打製石包丁	全長 9.6	全幅 4.5	全厚 1.3	重量 76 g	両端抉りあり。	千枚岩製
13	64	Ⅵ－2区 ST 5	壺	22.4	(1.3)			チャートの粗粒砂をわずかに含む。褐灰色。外面ナデ、ハケ。口唇部に列点紋あり。	
〃	65	〃	〃	14.6	(1.5)			チャートの粗粒砂を含む。灰白色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	66	〃	〃	16.4	(4.0)			チャートの粗粒砂を含む。褐灰色。外面ナデ、内面ハケ。口唇部に刺突紋を施す。	
〃	67	〃	〃		(8.7)	11.8		砂粒はほとんど含まない。にぶい黄橙色。内・外面ハケ調整。内面に指頭圧痕あり。底部に黒斑あり。	
〃	68	〃	〃	17.4	28.2	23.6		チャート・赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面は叩きをほとんどナデ消す、中位はハケ。内面はハケ、ナデ、指頭圧痕顕著。	
〃	69	〃	〃	17.9	30.4	26.3		チャートの小礫を少量含む。にぶい橙色。外面は頸部に丁寧なハケ。中位にヘラ磨き、下位に叩き。内面は頸部にヘラ磨き、他はハケ調整。指頭圧痕顕著。口唇部にヘラ粗化痕による加飾あり。下胴部に黒斑あり。	
〃	70	〃	〃		(2.0)		3.2	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。	
〃	71	〃	〃		(2.0)		3.6	チャート・石英の粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。底部に黒斑あり。	
〃	72	〃	〃		(1.6)		3.0	チャート・石英の粗粒砂を含む。橙色。底部に黒斑あり。	

遺物観察表 4

Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				LJ径	器高	胴径	底径		
13	73	Ⅵ－2区 ST 5	壺		(1.9)		5.0	チャートの小礫・粗粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	74	〃	〃		(2.6)		7.9	チャート・石英の小礫・粗粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	75	〃	〃		(2.9)		4.0	チャートの小礫を含む。褐灰色。外面叩き。内面放射状のハケ。底部に黒斑あり。	
〃	76	〃	〃		(2.4)		4.6	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ。底部に黒斑あり。	
〃	77	〃	〃		(3.3)		4.0	チャート・石英の小礫を含む。橙色。外面叩き。内面ハケ調整。底部に黒斑あり。	
〃	78	〃	〃		(3.5)		2.4	チャートの細粒砂を含む。褐灰色。外面叩き、内面ハケ。わずかに平底。	
〃	79	〃	〃		(3.1)		5.2	砂粒はほとんど含まない。にぶい橙色。内面ハケ調整。	
〃	80	〃	〃		(2.1)		8.3	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き、ハケ。	
14	81	〃	甕	17.2	(2.0)			チャート・石英の粗粒砂を含む。内・外面ナデ調整。	
〃	82	〃	〃	14.0	(3.4)			チャートの粗粒砂を少量含む。灰褐色。外面叩き。内面ナデ。	
〃	83	〃	〃	17.2	(2.7)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。内・外面煤ける。	
〃	84	〃	〃	14.8	(8.6)			チャートの細粒砂を少量含む。浅黄橙色。外面叩き＋ハケ。	
〃	85	〃	〃	15.4	(5.5)			チャート・石英の細粒砂をわずかに含む。浅黄橙色。外面叩き。内面ナデ。	
〃	86	〃	〃	16.1	(4.2)			砂粒をほとんど含まない。橙色。外面叩き。外面煤ける。	
〃	87	〃	〃	13.8	(3.8)			チャートの細・粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。	
〃	88	〃	〃	15.0	(15.3)	18.1		チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ＋ナデ。外面煤ける。	
〃	89	〃	〃	12.8	(15.3)	14.8		砂粒をほとんど含まない。にぶい橙色。口縁部内・外面ハケ調整。胴部外面叩き、内面指ナデ。	
〃	90	〃	〃	13.6	(9.2)	13.0		チャート・石英の粗粒砂を含む。橙色。外面胴部は叩き、頸部はハケ。内面はハケ。	
〃	91	〃	〃	10.7	12.2	10.9	1.4	チャートの小礫をわずかに含む。褐灰色。外面叩き＋ハケ、煤ける。内面指頭圧痕あり。わずかに平底。	
〃	92	〃	〃		(2.6)		3.2	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。	
〃	93	〃	〃		(2.7)		2.8	チャート・石英の小礫・粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。	
〃	94	〃	〃		(3.0)		3.7	チャート・石英の細粒砂を多く含む。褐灰色。外面叩き。	
〃	95	〃	〃		(4.0)		5.2	チャート・石英の細・粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面ハケ。外面煤ける。	
〃	96	〃	〃	12.0	25.9	17.3	3.6	チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面叩き。内面はハケ、指頭圧痕顕著。外面煤ける。	

遺物観察表 5

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
14	97	Ⅵ－2区 ST 5	甕	14.5	25.1	17.7	4.0	チャート・石英の粗粒砂を少量含む。灰褐色。外面叩き＋ナデ。内面ハケ＋ナデ。わずかに平底。	
〃	98	〃	〃		(4.6)		6.8	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ調整。内・外面煤ける。	
〃	99	〃	〃		(5.9)		5.4	チャート・石英・赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き＋ハケ。底部に黒斑あり。	
〃	100	〃	〃		(9.2)		6.2	チャート・赤色風化礫の細・粗粒砂を少量含む。外面叩き。	
〃	101	〃	〃		(4.0)		4.7	チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面叩き＋ハケ。内面ハケ。	
〃	102	〃	〃		(6.4)		3.8	チャートの細粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩きをナデ消す。	
〃	103	〃	〃		(4.0)		3.5	チャートの粗粒砂を少量含む。褐灰色。外面叩き。内面ハケ。底部煤ける。	
〃	104	〃	〃		(3.7)			チャートの小礫・粗粒砂を含む。褐灰色。外面叩き、のちハケ。内面指ナデ。	
15	105	〃	甕蓋		(4.4)			チャート・石英の粗粒砂、小礫を含む。橙色。外面ハケ。内面指頭圧痕あり。	
〃	106	〃	鉢	17.0	(3.2)			砂粒をほとんど含まない。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	107	〃	〃	16.9	(3.2)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩きをナデ消す。内面ハケ調整。	
〃	108	〃	〃	15.8	(2.7)			チャート・石英の細・粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面叩きをナデ消す。内面ハケ。	
〃	109	〃	〃	12.6	5.1		3.6	チャート・石英の粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	110	〃	〃	19.5	(6.0)			チャートの粗粒砂を含む。明褐灰色。外面叩きをナデ消す。内面ハケ調整。	
〃	111	〃	〃	17.0	(4.8)			チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。外面叩きをナデ消す。内面ハケ。	
〃	112	〃	〃	12.6	7.4		0.8	石英の粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。	
〃	113	〃	〃	13.2	7.5		2.0	チャートの粗粒砂を少量含む。灰褐色。外面叩きをナデ消す。平底。	
〃	114	〃	〃	15.1	8.0		1.0	チャート・石英の小礫・粗粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。わずかに平底。	
〃	115	〃	〃	13.6	8.5		2.4	チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面叩き、内面ハケをナデ消す。平底。	
〃	116	〃	〃		(5.6)			チャートの粗粒砂を含む。褐灰色。外面叩き。内面ハケ調整。	
〃	117	〃	〃	20.1	7.8		5.0	チャートの細粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面ハケ。口唇部面取り。外面に大きな黒斑あり。平底。	砂岩
〃	118	〃	砥石	全長 11.1	全幅 13.1	全厚 8.5		使用痕2面。	
〃	119	〃	支脚					チャートの粗粒砂を含む。橙色。器表の荒れが激しい。	
〃	120	〃	〃					チャート・石英の細・粗粒砂を含む。にぶい橙色。芯部に穿孔あり。外面指頭圧痕顕著。	

遺物観察表 6

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	脚径	底径	特徴	備考
16	121	Ⅵ－2区 ST 6	壺	23.9	32.3	28.9		チャートの粗粒砂・小礫を含む。橙色。外面ハケ、底部付近は叩き。内面ハケ。口唇部にハケ状原体による斜格子目状の刻目。底部に黒斑あり。	
〃	122	〃	〃	19.5	35.1	25.4	4.5	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き＋ハケ。内面粗いハケ調整。指頭圧痕顕著。口唇部に鋸歯波状紋。外面に大きな黒斑あり。	
〃	123	〃	〃	21.4	(21.8)	28.5		チャート・石英・赤色風化礫の小礫、粗粒砂を多量含む。浅橙色。外面叩きをナデ消す。内面ハケ＋ナデ。	
〃	124	〃	甕	19.1	36.9	25.6	5.4	チャートの粗粒砂をわずかに含む。橙色。外面叩き＋ハケ。内面粗いハケ。口唇部しっかりとした面取り。外面煤ける。	
〃	125	〃	〃	13.7	24.9	17.2	3.2	チャートの粗粒砂を含む。浅橙色。外面叩き＋ハケ。内面ハケ、指頭圧痕あり。口唇部面取り。上胴部に黒斑あり。	
〃	126	〃	〃		(1.7)		3.0	チャート・赤色風化礫の細粒砂を含む。にぶい橙色。	
〃	127	〃	〃		(3.2)		3.4	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	128	〃	〃		(3.9)		4.0	チャート・雲母の細・粗粒砂を含む。外面ハケ。内面指頭圧痕あり。平底。	
〃	129	〃	〃		(11.3)		4.0	チャート・赤色風化礫の小礫、粗粒砂を含む。橙色。底部外面に黒斑あり。平底。	
〃	130	〃	鉢	10.8	6.4		0.8	チャートの細粒砂を少量含む。橙色。	
〃	131	〃	高坏	14.1	(5.8)			チャート・赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	132	〃	〃		(2.5)			チャートの細・粗粒砂をわずかに含む。橙色。内・外面ハケ調整。脚部に穿孔あり。	
17	133	Ⅵ－2区 ST 7	壺		(12.1)			チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。外面叩きのちハケ。内面粗いハケ。	
〃	134	〃	〃		(25.1)	27.6		チャートの小礫・粗粒砂を含む。橙色。外面叩きのちハケ。内面ハケ。指頭圧痕あり。胴部外面一部被熱赤変する。黒斑あり。	
〃	135	〃	〃	14.7	(3.4)			チャートの粗粒砂・小礫を含む。口縁部外面ハケ。	
〃	136	〃	〃	13.0	(1.6)			チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。口唇部丁寧なナデによる凹線を施す。	
〃	137	〃	〃	18.9	(3.0)			チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。口縁部ハケ。口唇部ナデ。	
〃	138	〃	〃	12.0	(1.6)			チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。内・外面ハケ調整。	
〃	139	〃	〃	21.0	(1.7)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内・外面ナデ調整。	
〃	140	〃	〃	19.5	(2.7)			チャート・石英の細粒砂を多く含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	141	〃	〃		(2.2)		2.0	チャートの細粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き、ハケ、黒斑あり。	
〃	142	〃	〃		(2.7)		3.4	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面ハケ。	
〃	143	〃	〃		(4.5)			チャート・石英・赤色風化礫の粗粒砂を含む。灰白色。胴部突帯にハケ状原体による斜格子目状の刻目を施す。	
〃	144	〃	〃		(4.6)		3.0	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面ハケ。	

遺物観察表 7

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
17	145	Ⅵ－2区 ST 7	壺		(2.5)		4.8	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	146	〃	〃		(2.8)		5.6	チャート・石英の粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。平底。	
〃	147	〃	〃		(2.5)		8.8	チャートの細・雲母砂を少量含む。外面叩き、ハケ。内面ハケ調整。	
〃	148	〃	〃		(3.9)		5.0	チャートの粗粒砂を含む。褐灰色。底部外面に指頭圧痕あり。平底。	
〃	149	〃	〃		(1.8)		3.9	チャート・石英・赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	150	〃	〃		(3.2)		4.0	チャートの細・粗粒砂を含む。褐灰色。外面叩き、煤ける。平底。	
〃	151	〃	〃		(5.1)		4.2	チャート・石英の細・粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。平底。	
〃	152	〃	〃		(4.5)		7.0	チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。内面ナデ。平底。	
〃	153	〃	〃		(2.2)		5.0	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。	
〃	154	〃	〃		(2.6)		4.3	チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。内・外面ハケ、ナデ調整。平底。	
〃	155	〃	〃		(3.4)		5.2	チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。内・外面ハケ。平底。	
18	156	〃	甕	11.4	(2.4)			チャート・石英の小礫・粗粒砂を含む。橙色。外面ナデ、内面ハケ。	
〃	157	〃	〃	13.6	(2.9)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。外面煤ける。	
〃	158	〃	〃	13.8	(3.5)			チャート・石英・雲母の細・粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。内面ナデ。	
〃	159	〃	〃	11.8	(4.2)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。	
〃	160	〃	〃	12.9	(7.2)			チャートの粗粒砂を少量含む。口縁部外面ハケ。胴部外面叩き。内面ハケ。	
〃	161	〃	〃	15.9	(5.5)			チャートの粗粒砂を含む。褐灰色。外面叩き。	
〃	162	〃	〃	12.8	(6.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き、指ナデ。内面ハケ。	
〃	163	〃	〃	16.6	(8.2)			チャート・石英の粗粒砂を含む。にぶい赤褐色。内・外面ハケ調整。内面指頭圧痕顕著。	
〃	164	〃	〃	14.0	24.8	17.0	4.2	チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。外面口縁～中胴位叩き、下胴位ハケ。内面口縁～中胴位ハケ、下胴位指ナデ。外面煤ける。	
〃	165	〃	〃	16.5	(15.5)	19.6		チャート・赤色風化礫の小礫・粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面叩き、内面ハケ。	
〃	166	〃	〃		(3.0)		2.6	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ。	
〃	167	〃	〃		(1.7)		3.5	チャート・石英の粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	168	〃	〃		(2.7)		3.4	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ調整。	

遺物観察表 8

Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量（cm） 口径	器高	脚径	底径	特徴	備考
18	169	Ⅵ－2区 ST 7	甕		(2.0)		4.4	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。底部外面煤ける。	
〃	170	〃	〃		(2.4)		6.2	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ナデ。平底。	
〃	171	〃	〃		(2.8)		3.0	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。	
〃	172	〃	〃		(5.0)		3.0	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面指頭圧痕顕著。	
〃	173	〃	〃		(4.9)		3.6	チャート・石英の細・粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。	
〃	174	〃	〃		(3.2)		8.0	チャートの細粒砂を含む。橙色。外面ハケ、内面指頭圧痕あり。平底。	
〃	175	〃	〃		(10.5)		2.5	チャートの細粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面指ナデ。	
〃	176	〃	〃		(4.9)		3.4	チャートの細粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面叩き。底部黒斑あり。	
〃	177	〃	鉢	10.0	4.6		4.6	砂粒をほとんど含まない胎土。褐灰色。内・外面の器表の荒れが激しい。平底。	
〃	178	〃	〃	9.2	3.5		3.5	チャートの小礫・粗粒砂を含む。橙色。内面に指頭圧痕あり。底部に黒斑あり。	
〃	179	〃	〃	8.6	3.9		4.8	チャートの細粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。外面煤ける。	
〃	180	〃	〃	15.2	8.4		3.2	チャートの小礫・粗粒砂を含む。橙色。外面叩きを一部ナデ消す。内面指ナデ。黒斑あり。	
〃	181	〃	〃	18.4	7.7		7.0	チャートの粗粒砂・小礫を含む。灰白色。外面叩き。内面粗いハケ。	
〃	182	〃	〃	8.9	3.6		1.5	チャートの細粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面指頭圧痕顕著。	
〃	183	〃	〃	12.2	5.9			チャートの小礫・粗粒砂を含む。橙色。外面調整不明。内面ハケ。	
〃	184	〃	〃	19.6	6.4		7.4	チャートの細粒砂を含む。褐灰色。外面叩き＋ナデ。内面ハケ調整。平底。	
〃	185	〃	高坏	30.0	(5.2)			チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。外面ハケ、ナデ。内面ナデ。	
〃	186	〃	〃	18.6	(2.9)			砂粒をほとんど含まない胎土。橙色。内・外面丁寧なナデ。	
〃	187	〃	〃		(4.5)			チャートの細粒砂をわずかに含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	188	〃	鉄鏃	全長 4.3	全幅 1.7	全厚 0.2	重量 6 g		
〃	189	〃	支脚					砂粒をほとんど含まない胎土。にぶい橙色。内・外面指頭圧痕顕著。外面煤ける。	
〃	190	〃	〃					砂粒をほとんど含まない胎土。橙色。外面指頭圧痕顕著。	
〃	191	〃	〃					砂粒をほとんど含まない胎土。橙色。全面を強くナデている。	
〃	192	〃	〃		(3.0)		7.0	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面に指頭圧痕あり。	

遺物観察表 9

Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
20	193	Ⅵ－3区 ST 8	壺	28.0	(3.0)			チャートの粗粒砂・小礫を含む。にぶい橙色。内・外面ナデ調整。	
〃	194	〃	〃		(7.2)		2.5	チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面ハケ。底部外面縁ける。	
〃	195	〃	〃		(11.1)		5.1	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩きのち目の粗いハケ。平底。	
〃	196	〃	〃		(6.4)		7.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の調整不明。	
〃	197	〃	甕		(19.4)	17.3		チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面指頭圧痕顕著。外面縁ける。	
〃	198	〃	〃	14.4	(5.6)			チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい褐色。外面叩き。	
〃	199	〃	〃	14.4	(5.9)			チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	200	〃	〃	12.0	(5.0)			チャートの粗粒砂・小礫を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	201	〃	〃	8.8	(7.9)	10.9		チャートの細粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。内面に指頭圧痕あり。	
〃	202	〃	〃		(15.6)	12.0	2.5	チャート・石英の細粒砂を多く含む。橙色。外面叩き、内面ハケ。上胴部・下胴部に黒斑あり。	
〃	203	〃	〃	11.8	(15.9)	14.1		チャートの粗粒砂を含む。灰褐色。外面叩き。内面ハケ。	
〃	204	〃	〃	9.6	17.9	12.9	2.6	チャート・石英の粗粒砂を多く含む。橙色。外面全体に叩き、中～下胴部の一部にハケ。内面目の粗いハケ。底部に黒斑あり。	
〃	205	〃	〃	13.0	(11.2)	15.2		チャートの細粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面口縁部～上胴部横方向のハケ。中胴部～横方向の叩き。内面ナデ。外面全体が煤ける。	
〃	206	〃	〃		(13.0)	13.3	3.8	チャート・石英の粗粒砂・小礫を含む。にぶい橙色。外面叩き、内面ハケ。	
〃	207	〃	〃		(11.0)		4.1	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩きのちハケ。内面指頭圧痕顕著。内・外面縁ける。平底。	
〃	208	〃	〃		(11.0)			チャートの粗粒砂を含む。明褐灰色。外面叩き。内面ハケ。内・外面煤ける。	
〃	209	〃	〃		(10.5)			チャート・石英の粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩き。内面ハケ、指ナデ。外面に黒斑あり。	
〃	210	〃	〃		(5.3)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。	
〃	211	〃	〃		(7.3)		3.0	チャートの粗粒砂を少量含む。灰褐色。外面叩き、ハケ。内面ハケ。内・外面煤ける。	
〃	212	〃	〃		(5.2)		2.4	チャート・石英の細粒砂を含む。にぶい褐色。外面叩き。平底。	
〃	213	〃	〃		(5.4)		3.8	チャートの粗粒砂・小礫を含む。橙色。外面叩き。内面ハケ。外面縁ける。	
〃	214	〃	鉢	19.0	(6.5)			チャートの粗粒砂・小礫を含む。橙色。内面ハケ調整。底部に黒斑あり。	
〃	215	〃	〃	19.0	(6.0)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	216	〃	〃	11.1	4.6		4.0	チャートの粗粒砂を含む。橙色。内面ハケ調整。外面ナデ調整、指頭圧痕顕著。	

遺物観察表 10

Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
20	217	Ⅵ－3区 ST 8	鉢	11.5	4.7		2.9	チャート・石英・赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。外面わずかに叩き。内面調整不明。	
〃	218	〃	〃	16.4	5.1		5.4	砂粒をほとんど含まない胎土。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	219	〃	〃	12.4	5.0			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ、指ナデ。	
〃	220	〃	〃	9.8	3.9		1.5	チャート・石英の粗粒砂を多く含む。灰褐色。内面ナデ。外面煤ける。	
〃	221	〃	〃	15.0	6.3			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。内面ナデ調整。外面左上がりの叩き。平底。	
〃	222	〃	〃	12.9	7.0		2.4	チャートの粗粒砂・小礫を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。	
〃	223	〃	〃	9.4	4.9		4.9	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	224	〃	支脚	7.0	4.9		5.5	チャートの粗粒砂・小礫を含む。にぶい橙色。	
〃	225	〃	〃		(7.3)		8.4	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面指頭圧痕顕著。	
〃	226	〃	上師器 甕		(11.3)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。底部に焼成前穿孔あり、径 8 mm。下胴部に黒斑あり。	
21	227	Ⅵ－3区 ST 9	壺	10.4	18.0	15.6		チャートの細粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	228	〃	〃		(11.3)		5.2	チャート・石英・赤色風化礫の粗粒砂・小礫を多く含む。浅黄橙色。外面叩きのちハケ。内面指ナデ。底部に大きな黒斑あり。	
〃	229	〃	甕		(5.1)		3.6	チャートの粗粒砂・小礫を多く含む。にぶい褐色。外面叩き。内面指ナデ。平底。	
〃	230	〃	〃		(6.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。内面指頭圧痕顕著。外面煤ける。	
〃	231	〃	〃		(10.9)			チャートの粗粒砂を少量含む。褐灰色。内・外面ハケ。内・外面煤ける。	
〃	232	〃	〃		(9.4)		3.0	チャート・石英の粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩き。内面指ナデ。底部に黒斑あり。内面煤ける。	
〃	233	〃	鉢	10.4	2.8			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	234	〃	〃	11.2	3.3			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内面ナデ。	
〃	235	〃	〃		(2.9)		3.6	チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	236	〃	〃	17.6	7.1			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。内面横方向のハケ、ナデ調整。外面横ナデ調整。器表の荒れが激しい。	
〃	237	〃	〃	12.2	7.4			チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。丸底。	
〃	238	〃	〃	8.5	6.0	8.2	2.0	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。口唇部は丸くおさめる。内面縦方向のハケ調整を施す。外面ナデ調整。	
〃	239	〃	高坏	19.4	(6.6)			チャートの細粒砂を多く含む。にぶい橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	240	〃	〃	21.0	(6.0)			チャートの粗粒砂・小礫を含む。橙色。内・外面調整不明。	

遺物観察表11

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
21	241	Ⅵ－3区 ST9	高坏		(4.3)		13.0	チャートの粗粒砂・小礫を含む。橙色。脚部に径9mmの穿孔。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	242	〃	支脚		(14.2)		9.2	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面指頭圧痕顕著。	
〃	243	〃	〃		15.5		5.5	チャート・石英の粗粒砂を含む。褐灰色。外面叩き。指頭圧痕顕著。	
〃	244	〃	〃					チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。外面叩き、指頭圧痕顕著。	
〃	245	〃	〃					チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ナデ。	
22	246	Ⅵ－3区 ST10	壺		(3.3)		4.4	チャートの細粒砂を含む。にぶい橙色。平底の底部から大きく開いて立ち上る。外面縦方向のハケ調整。	
〃	247	〃	甕	14.4	23.3	20.6	4.8	チャートの細粒砂を含む。灰褐色。外面口縁部はハケ、胴部は叩き。内面口縁部はナデ、胴部はハケ。内面に指頭圧痕あり。外面全体が煤ける。	
〃	248	〃	〃		(23.3)		3.4	チャートの粗粒砂を含む。橙色。胴部外面叩き、指頭圧痕あり。底部外面ナデ。内面調整不明。上胴部、下胴部に黒斑あり。	
〃	249	〃	〃	13.9	(11.7)	16.6		チャートの粗粒砂を多く含む。明褐灰色。口縁部は「く」の字状に短重して外反する。外面は叩き調整後縦方向のハケ調整を施す。内面ナデ調整を施す。	
〃	250	〃	〃	14.2	20.2	17.9		チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ、指ナデ。外面被熱赤変し、煤ける。丸底。	
〃	251	〃	手捏ね	4.7	(4.0)			チャート・石英の粗粒砂・小礫を多く含む。にぶい褐色。内・外面指頭圧痕顕著。	
〃	252	〃	〃		3.8			チャートの細粒砂を含む。褐灰色。内・外面指頭圧痕顕著。	
〃	253	〃	〃		2.8			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面指頭圧痕顕著。	
〃	254	〃	〃	4.6	3.2			チャートの細粒砂を含む。灰褐色。外面煤ける。	
〃	255	〃	鉢	8.9	2.6			チャートの細粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面指頭圧痕顕著。丸底。	
〃	256	〃	〃		3.9			チャートの細粒砂を含む。橙色。内・外面ナデ調整。	
〃	257	〃	〃	8.8	3.2		4.0	チャートの細粒砂を少量含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	258	〃	脚付鉢	10.0	5.4		4.2	チャートの細粒砂を含む。橙色、内面ナデ。	
〃	259	〃	鉢		(3.7)		4.6	チャートの細粒砂を含む。橙色。内面横方向のハケ調整を施す、指頭圧痕顕著。平底。	
〃	260	〃	土玉	径 2.6		全厚 (1.5)	重量 9g	チャートの細粒砂を少量含む。にぶい橙色。	
〃	261	〃	礪石	全長 17.4	全幅 6.5	全厚 3.3	重量 590g	石英粗面岩製。使用痕6面。	
〃	262	〃	〃	全長 16.2	全幅 10.7	全厚 1.7	重量 595g	砂岩製。使用痕1面。	
23	263	Ⅵ－1区 SK5	甕	14.9	(2.3)		7.0	チャートの細粒砂を含む。橙色。口縁端部外面に刻目あり。頸部に3条の沈線を施す。口縁部外面屈ハケ横ハケ。口縁部内面横ハケ。	
〃	264	〃	〃		(2.5)		7.0	チャート・石英の粗粒砂・小礫を含む。浅黄色。内・外面器表の荒れが激しい。	

遺物観察表 12

Fig. No.	掲図番号	出土地点	器種	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
23	265	Ⅵ－1区 SK 6	壺		(15.1)		4.2	チャート・石英の小礫・粗粒砂を多く含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	266	〃	甕	18.2	23.8			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。橙色。内・外面の器表の荒れが著しい。口縁部から肩部にかけて黒斑あり。内・外面横ナデ。口唇端外面に沈線1条。口縁部外面に黒斑を認める。胴上部内面に1条の沈線を施す。胴部内面ナデ。肩下部内面ナデ。底部は欠損。	
〃	267	Ⅵ－2区 SK11	壺	17.8	(2.5)			チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。内・外面ナデ調整。	
〃	268	〃	〃	14.0	(1.4)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	269	〃	〃		(1.4)		4.9	チャートの礫粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	270	〃	甕	14.0	(2.9)			砂粒をほとんど含まない胎土。にぶい橙色。口縁部外面に指頭圧痕あり。内面ハケ。外面撫付る。	
〃	271	Ⅵ－3区 SK12	〃	14.9	(3.2)			チャートの礫粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	272	〃	高坏		(6.2)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	273	〃	支脚		(4.3)		7.6	チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
24	274	Ⅵ－3区 SK13	壺	15.0	(14.8)			チャート・石英・赤色風化礫の粗粒砂・小礫を多く含む。にぶい橙色。外面叩き、指頭圧痕あり。内面ハケ。	
〃	275	〃	〃	16.0	(15.9)			チャートの礫粒砂を含む。橙色。外面は叩きのちハケ。内面調整不明。口唇部丁寧な面取り。	
〃	276	〃	長頸瓶	8.6	(13.2)			砂粒をほとんど含まない胎土。橙色。内・外面ハケ調整。	
〃	277	〃	甕	16.8	(35.5)	24.8		チャート・石英・赤色風化礫の礫粒砂を含む。浅黄橙色。外面口縁部ハケ。胴部叩きのちハケ。内面ハケ。指頭圧痕顕著。口唇部面取り。	
〃	278	〃	〃	16.2	(26.9)	22.5		チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ。指頭圧痕顕著。外面撫付る。	
〃	279	〃	〃		(2.9)			チャート・石英の粗粒砂を含む。橙色。外面に黒斑あり。	
〃	280	〃	〃	15.4	24.2	15.8	4.0	チャート・赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面胴部叩き。底部～下胴部ハケ。内面指ナデ、指頭圧痕あり。底部に黒斑あり。内・外面撫付る。	県西部搬入品
〃	281	〃	〃		(12.7)			チャートの粗粒砂を含む。褐灰色。外面叩きのちハケ。内面ハケ、指ナデ。大きな黒斑あり。丸底。	
〃	282	〃	〃		(8.8)		2.6	チャートの粗粒砂を含む。にぶい褐色。外面叩きのちハケ。内面調整不明。	
〃	283	〃	〃		(7.1)			チャート・石英の粗粒砂・小礫を含む。にぶい橙色。外面叩きのちハケ。内面指ナデ。丸底。	
〃	284	〃	鉢	17.6	6.6		2.2	チャートの粗粒砂を含む。褐灰色。内・外面ハケ。底部に黒斑あり。	
〃	285	〃	土錘器 底	13.2	18.0		1.7	チャートの礫粒砂を含む。明褐灰色。外面叩き。内面ハケ、指ナデ。底部に径1.6cmの穿孔あり。上胴部、底部に黒斑あり。	
25	286	Ⅵ－2区 壺棺	壺		(75.6)	73.2	7.2	チャート・石英・角閃石の礫粒砂を少量含む緻密な胎土。にぶい褐色。内・外面に粗いハケ調整。	壺棺 蔵嶽搬入品
26	287	Ⅵ－2区 包含層	〃		(54.2)	46.2	8.0	チャート・石英の礫粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面上胴部はハケ、ヘラ磨き、中胴部～下胴部は叩き、ハケ。内面はハケ。壺底に網籠子状の刻目を施す突帯を貼付。底部外周に黒斑あり。	壺棺
27	288	Ⅵ－2区 SD14	〃	22.0	(3.8)			チャートの細粒砂を含む。浅黄橙色。口唇部に刻目を施す。	

遺物観察表13

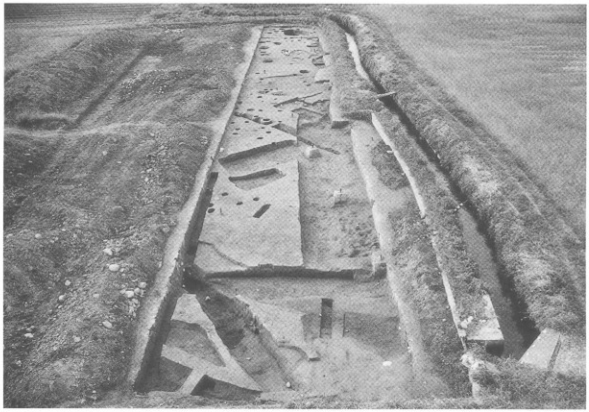
Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
27	289	Ⅵ－2区 SD14	壺		(1.9)		5.8	チャート・長石・石英の粗粒砂を含む。橙色。内面ハケ調整。	
〃	290	Ⅵ－1区 SD 6	甕	15.9	(5.0)			チャートの粗粒砂・小礫を含む。橙色。口縁端部面取り。頸部外面縦ハケ＋横ナデ。口縁部内面横い横ハケ。	
〃	291	Ⅵ－2区 SD13	〃		(4.5)		7.8	チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	292	〃	〃		(6.2)		4.6	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面ハケ調整。平底。	
〃	293	Ⅵ－3区 SD14	〃		(2.2)		3.1	チャート・石英・長石の細・粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。	
〃	294	〃	手捏ね		(1.7)			チャートの細粗粒砂を含む。明褐灰色。内・外面に指頭圧痕あり。	
〃	295	〃	支脚		(5.7)			チャートの小礫を含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
〃	296	Ⅵ－2区 SD13	砥石	全長 (9.8)	全幅 1.8	全厚 1.4	重量 32 g	真岩製。全面をよく研磨する。使用痕２面。	千枚岩製
29	297	Ⅵ－1区 SD 1	石器 石包丁	全長 (4.6)	全幅 (2.85)	全厚 (0.5)	重量 10 g	直縁刃を持つ片刃石包丁。両面とも丁寧な研磨により仕上げる。約手分が欠損するが、中央部の単孔は両面より穿たれる。	
〃	298	〃	土師器 坏		(3.0)		7.0	精選された胎土。灰白色。内・外面器表の荒れが激しい。底端部がわずかに上がる。	
〃	299	〃	土師器 鉢or	24.2	(4.4)			石英の粗粒砂を多く含む。鍔部上下に横ナデ。内外面横ナデ調整。	
〃	300	〃	〃	24.0	(6.0)			石英・長石赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。赤橙色。口縁端部・鍔端部丁寧な面取り、鍔部上下面横ナデ。	
〃	301	〃	須恵器 壺		(5.0)			石英の細粒砂を含む。灰色。内面横ナデ。	
〃	302	〃	須恵器 甕		(7.3)			精選された胎土。灰色。外面格子目の叩き。内・外面横ナデ。指頭圧痕あり。	
〃	303	Ⅵ－1区 SD 2	高坏		(6.5)			チャートの粗・細粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ。内面横ハケ調整。	
〃	304	〃	須恵器 坏		(2.1)		6.6	精選された胎土。灰色。内・外面横ナデ調整。	
〃	305	〃	須恵器 壺		(6.0)		8.8	精選された胎土。灰色。内・外面横ナデ調整。	
〃	306	〃	須恵器 坏		(1.9)			精選された胎土。灰色。内・外面横ナデ調整。	
〃	307	Ⅵ－1区 SD 4	土師器 皿	11.8	3.1			チャートの細粒砂を含む。淡橙色。口縁部内外面横ナデ。底部内面指頭圧痕あり。口縁部外面に粘圧痕あり。	
〃	308	〃	瓦器 鍋	21.6	(3.3)			チャート・石英の細・粗粒砂を含む。灰白色。胴部は粘土紐による貼付後、撫み出し。	
〃	309	Ⅵ－2区 SD11	土師器 小坏	7.7	2.0		3.7	精選された胎土。明褐灰色。内・外面ナデ調整。口唇部丸くおさめる。	
〃	310	〃	〃	7.9	1.8		3.4	チャート・赤色風化礫の細粒砂を含む。灰白色。内・外面横ナデ調整。口唇部丸くおさめる。	
〃	311	Ⅵ－2区 SD15	瓦器 鍋	18.5	(3.8)			精選された胎土。灰色。内・外面横ナデ調整。頸部外面に指頭圧痕顕著。	
〃	312	〃	〃	15.8	(5.8)			チャートの細粗粒砂を少量含む。灰色。内・外面の器表の荒れが激しい。	

遺物観察表14

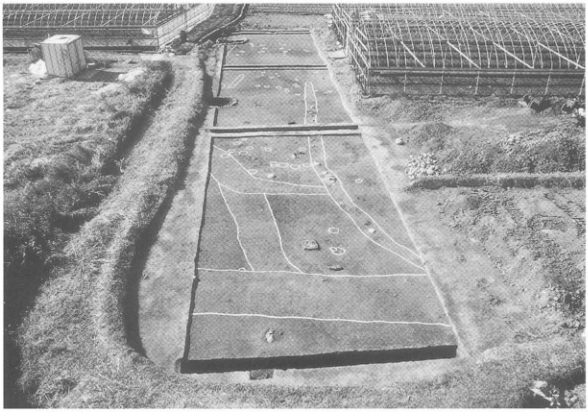
Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	脚径	底径	特徴	備考
29	313	Ⅵ－3区 SD10	土師器 坏		(2.3)			精選された胎土。橙色。内・外面ナデ調整。外底部糸切痕あり。	
〃	314	〃	〃		(1.6)		7.6	チャートの細粒砂を含む。明褐灰色。貼付高台はやや外傾にふん張る。	
〃	315	〃	〃		(1.5)		高台径 7.0	チャートの細・粗粒砂を少量含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。貼付高台。	
〃	316	〃	〃		(1.6)		6.4	チャートの細・粗粒砂を少量含む。橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。貼付高台。回転台左回り。	
〃	317	〃	〃		(2.3)		6.0	チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。しっかりとした貼付高台。	
〃	318	〃	須恵器 高坏		(2.4)		高台径 6.0	精選された胎土。灰色。内・外面ナデ調整。端部は丁寧なナデ。	
〃	319	〃	須恵器 壺		(7.8)		8.4	チャート・石英・長石の細・粗粒砂を少量含む。灰色。外面頸部に3条の凹線。波状紋を施す。内面ナデ調整。	
31	320	Ⅷ－1区 SD1	壺	24.4	(1.5)			チャートの小礫・粗粒砂を含む。橙色。大きく外反する口縁部。口縁端部に粘土紐状が施される。円形浮紋に刺突したものを貼付。外面調整不明。内面横ナデ調整。	
〃	321	〃	〃	13.7	(4.0)			チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。口縁部上端から大きく外反する。口縁端部しっかりした面取り。口縁部内面は粗いハケ調整。外面上端に縦方向のハケ調整を施す。	
〃	322	〃	〃	14.3	(9.0)			チャートの小礫を含む。にぶい橙色。口縁部は「く」の字状に屈曲してやや大きく外反する。口縁部内・外面横方向のハケ調整。外面胴部不定方向のハケ調整。内面上半のハケ調整、強固圧痕顕著。	
〃	323	〃	〃	14.6	(3.2)			精選された胎土。にぶい橙色。内・外面共横ナデ調整を施す。口縁部下に1条の沈線あり。	
〃	324	〃	〃		(2)			チャート・雲母の細・粗粒砂を含む。赤褐色。平底から内湾気味に立ち上る。内・外面ナデ調整。	
〃	325	〃	〃		(2.0)		2.7	チャート・石英の粗粒砂を含む。にぶい橙色。平底から大きく開いて立ち上る。外面は緩方向のハケ調整を施す。内面は指頭圧痕を認める。	
〃	326	〃	甕	13.8	(3.4)		4.6	チャート・石英の細・粗粒砂を含む。にぶい赤褐色。口縁部は斜上方にやや立ち上がる。口縁部内・外面横ナデ調整を施す。外面煤ける。	
〃	327	〃	〃	17.4	(2.8)			チャートの小礫を含む。浅橙色。口縁部は「く」の字状に屈曲し外反する。口縁部外面は緩方向の粗いハケ調整のち横ナデ調整を施す。内面ナデ調整。口縁端部に1条の沈線を施す。	
〃	328	〃	〃		(1.5)			チャートの小礫を含む。にぶい橙色。平底から大きく開いて立ち上る。外面ナデ調整、内面指頭によるナデ調整。外面煤ける。	
〃	329	〃	〃	13.0	(5.6)		2.2	チャートの粗粒砂を含む。赤褐色。口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁部は内・外面横ナデ調整。胴部外面は左下りの削きを施す。内面は指頭によるナデ調整。	
〃	330	〃	〃		(7.4)			チャート・石英の小礫を含む。丸底の底部から内湾して立ち上る。内・外面共不定方向のハケ調整を施す。	
〃	331	〃	鉢	13.5	6.1			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面に黒斑あり。内・外面整美の荒れが激しい。内外面共磨　耗著しく観察不可能。	
〃	332	〃	高坏	13.6	(2)			精選された胎土。にぶい橙色。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。4孔を穿つ。外面脚方向、杯上がりのハケ調整。内面横方向のハケ調整を施す。	混入品
〃	333	〃	支脚		(2.7)		8	チャートの小礫を含む。浅黄橙色。脚の外面右上がりの押き。内面指頭圧痕顕著。	

写真図版

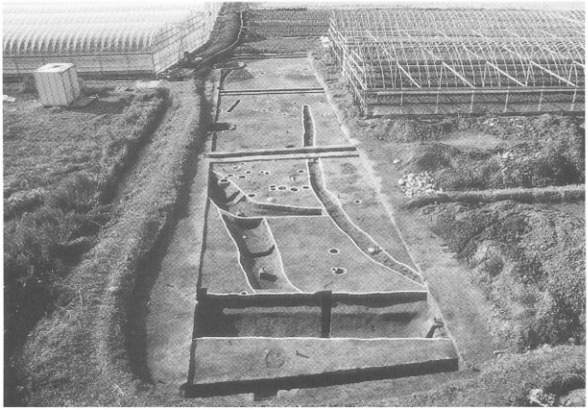
Ⅵ－１区中層完掘状況（東より）



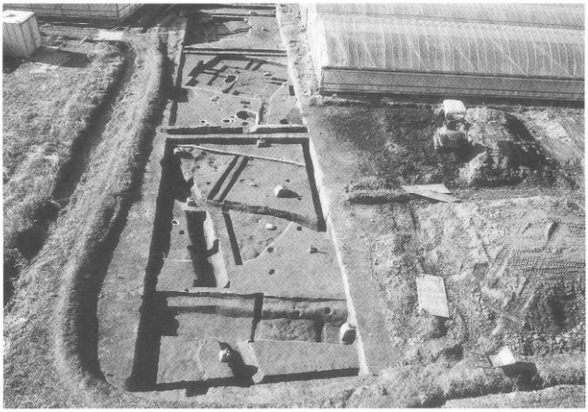
Ⅵ－１区下層完掘状況（東より）



Ⅵ－２区上層検出状況（東より）



Ⅵ－２区上層完掘状況（東より）



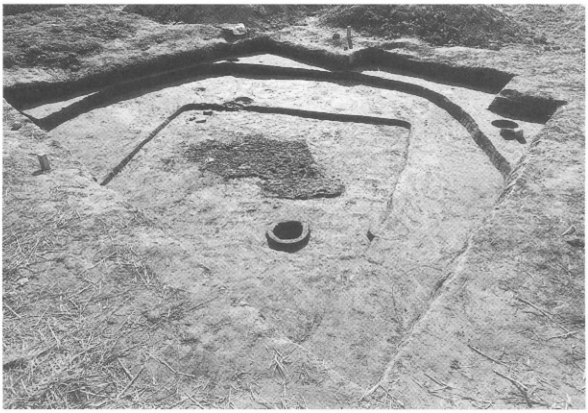
Ⅵ－２区下層完掘状況（東より）

Ⅵ－３区検出状況（東より）

Ⅵ－３区検出状況（西より）

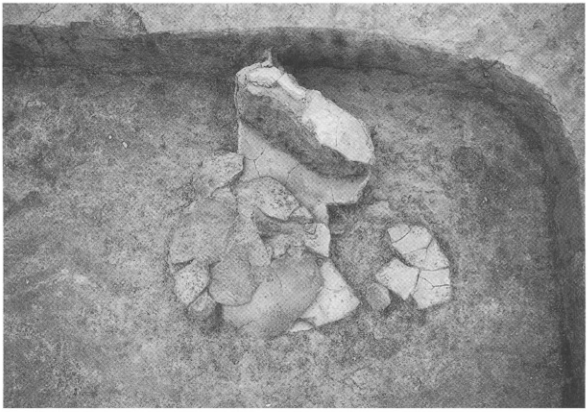
Ⅵ－３区完掘状況（東より）

Ⅵ－３区完掘状況（西より）



ST１完掘状況

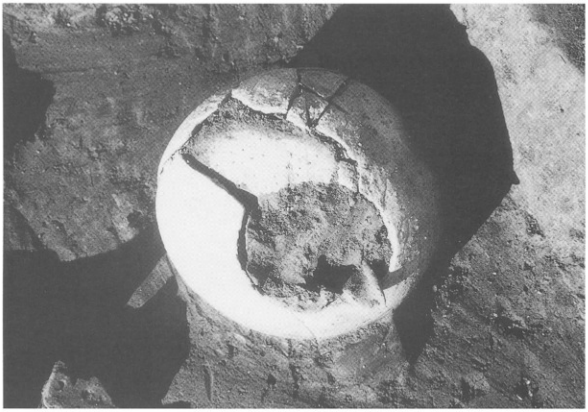
ST 2 完掘状況



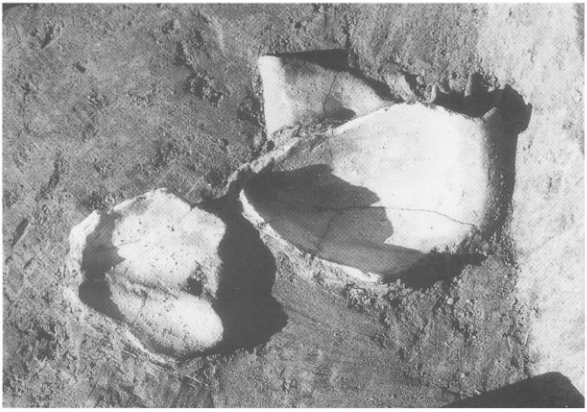
ST 2 遺物出土状況（14・15）

ST 2 遺物出土状況（16）

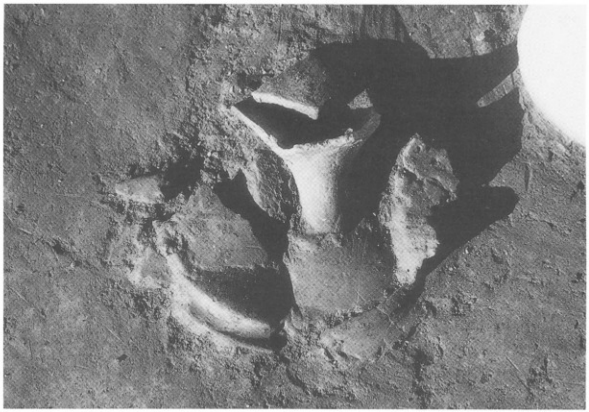
ST 3 完掘状況



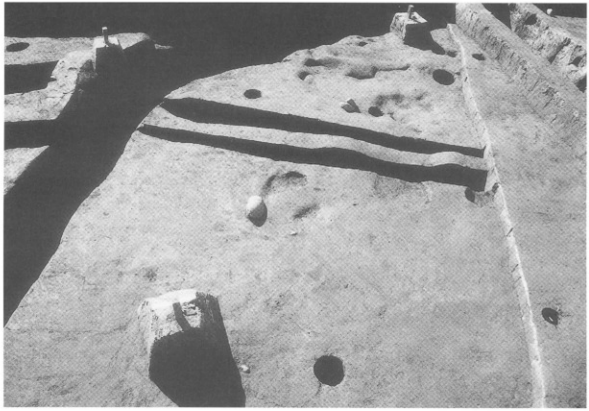
ST 3 遺物出土状況（24）



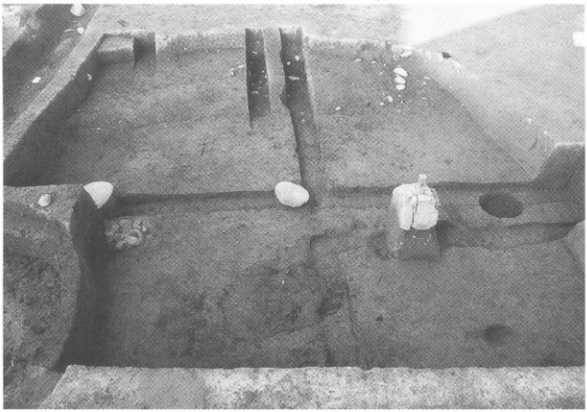
ST 3 遺物出土状況（28）



ST 3 遺物出土状況（44）



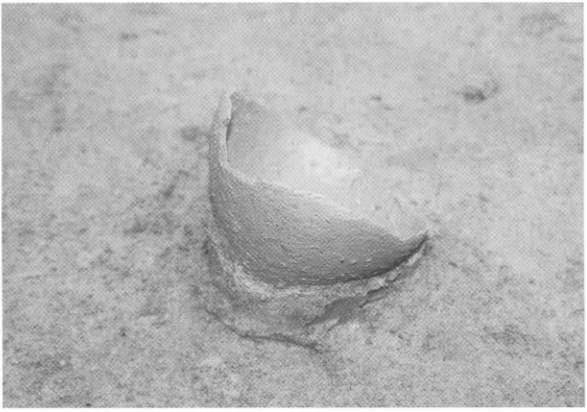
ST 4 完掘状況



ST 5 完掘状況

ST 5 遺物出土状況（67）

ST 5 遺物出土状況（69）



ST 5 遺物出土状況（112）